

サンガツド―ニガツド―カスミニツツマレテサナガ  
 ラユメノゴトク。アキワカスガノヤシロカンサ  
 ビ。タムケヤマノモミジユーヒニハユルサマコ  
 トニミドコロアリ。ヒトナツカシゲニヨリクル  
 シカノハルワワケテモヤサシク。アキヨリフユニ  
 カケテアイオンシキリニヒトノネムリオサマ  
 スモ。ナラニワカクベカラザルフゼーナルベシ。  
 サホサキノレンコーニキタオカギリカスガ  
 タカマドノヤマヤマオヒガシニ。ヤタヤマイコマヤ  
 マオニシニヒカエテ。ト―ザイシジツチョー。ナ  
 ンボクシジューゴチョー。ガイロセーゼントシテ。  
 キタニダイダイリノキニューデンオアオ。スザクノ  
 オ―ジミナミニハシリテ。ナンタンニラジヨ―モ  
 ンオフマエタルイニシエノナラノミヤコワ。イカ

○「夢の如く」を別々にいふ時、アクセントは  
 ヌメノゴトクとなる。

ニウツクシク。イカニサカンナリシゾ。イマワカ  
 クサヤマニノボリテコキョーノアトオテンボース  
 レバ。ガンカニヨコタワルナラシガイノニシ。ト―  
 クツラナルデンエンノアイダニト―ザイニハシ  
 ルミスジノミチワ。キタヨリカゾエテイニシエノ  
 イチジョーニジョーサンジョーノオ―ジノナゴリ  
 トス。ダイゴクデンノアトハルカニシテンスベク。  
 ミナミノカタコーリヤマノマチノヒガシニ。ラジ  
 ヨーモンノアトイマモノコレリトユー。ソノカミ  
 オ―ミヤビトノウメオカザシモミジオカザシテ  
 オ―ライシケンミヤコオ―ジ。イマニシテオモエ  
 バタダイチジョーノユメニスギズ。  
 サラニコーベオメグラシテミナミオノゾメバ。  
 ヤマトヘーヤノツクルトコロ。ハルカニウネビヤ

○「遠く連なる」を別々にいふ時、アクセント  
 はト―クツラナルとなる。

○「都大路」を別々にいふ時、アクセントは、  
 ミヤコオ―ジとなる。

○「大平原」を別々にいふ時、アクセントは  
 ヤマトヘーヤとなる。

マ ミミナシヤマ カグヤマノ サンザン マユズミノ  
 ゴトク ソノ ミナミニ ヒトキワ タカク トーノミネ  
 ヨシノノ ヤマヤマ ツラナルオ ミル。アイスベク  
 ウツクシキ サンヤワ、タイコ イライノ レキシト ム  
 スビ プンガクト ムスビテ、カン イヨイヨ、フカシ。

指導概要

(一) 教材

- (1) 先づ通讀によつて敘述の機構が五段に分けられてある事を掴ませ一段づゝ精讀して行くがよい。
- (2) すべて地圖によつて、神社佛閣山河の位置を知らせつゝ漸次語句の理解に入るのである。第一段及二段は今の奈良市を中心に書かれてをり、第三段で昔の奈良の都を想ひ浮べて、第四段で若草山の上より、舊都の名残を見てゐることを明瞭にしておく事が肝要である。語句についてはむづかしいものが多い。然しこの語句の持つ味と匂ひとが十分に解らなければ、この文の奈良そのものゝ色も香も、知る事が出来ないのである。咲く花の匂ふが如く、色移り香失せて年すでに久し、朱の廻廊山の緑に映え、一千二百年の面影を殘せり。伽藍半ばすたれたれど、池水に影をうつして、さながら夢の如く、哀音しきりに人の眠をさます。羅城門ふまへたる、そのかみ、大官人、梅をかざし、一場の夢、等、文に即して、よく味ははせ理解させなければならぬ。

- (3) 文語文であるから、巧な朗讀を多くする事によつて情景、情感を自ら兒童の心に起させなければならない。文語文の眞に徹底した指導は、精讀によつて行はれるものである。
- (4) 神社佛閣の由緒縁起等は一々調べる事は時間がかゝり精讀の時間に之まで説くのは却つて兒童の理解を妨げる様な事になるから、兒童自らしらべさせるか或は指導者に於てしらべ、豫め小黑板に書くか謄寫等にでもして置くがよからう。

(二) 挿畫

百四頁の寫眞は、興福寺の五重の塔が猿澤の池水に影をうつしてゐる南都の美觀である。  
 百五頁の寫眞は三月堂奈良第一の古い建物である。五間四面の建物であつたが鎌倉時代に玄關風の禮堂を前の方につけ足した。

百六頁の地圖は現在の奈良市及び附近の舊都の跡を示した圖である。

## 第十七 修行者と羅刹

一 要旨

印度の國雪山の中に煩惱をすて、只一すぢに解脱得道を求めて理を究め性を盡し、一切諸法を覺知し、遂に悟の境地に入つたありし日の釋迦牟尼の物語によつて、佛教の何たるかを理解させ、高く淨らけきものゝ浸潤によつて宗教的

情操にふれさせると共に、この尊い御佛の教の言葉と我が國語音との關係を識らせる。

## 二 指導觀

(一) 本文は涅槃經の聖行品第七の四からとつたもので、これを兒童向に改作したのである。雪山中菩提樹のかげに、迷妄を脱却し徳を圓成して、不生不滅な法身の眞證に歸した釋迦の涅槃を書いたものである。

(二) 「色はにほへど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ、有爲の奥山今日越えて、淺き夢見じ、醉ひもせず」まことにくゆりいみちき言葉である。花は咲いても忽ち散り人は生れてもやがて死ぬ、世の有限なるものゝ生滅轉變して定めなき事はすべて、生あるものゝ身の上にくぐり來て、どうしてもまぬかれる事が出来ないものである。しかし人生の永劫の實在を感じ、永遠の流轉、輪廻を信じ永生を思ひ、そして生滅無常を超越してしまへばもう淺はかな夢も見ず迷もない。そこに大悟の境地がある。

幹にあり、石にきざんだゆかしい言の葉、永遠に朽ちせぬ言の葉、これがみ佛の教である、その教を悟り得たのが佛陀釋迦牟尼であつた。

(三) 釋迦は今より二千四百年程前の人であつた。釋迦については、兒童に最も親しいのは四月四日花祭りの日、花御堂の中に水盤に安置された御姿であらう。灌佛會、又は甘茶の祭りといつて、釋迦降誕の祭日である。咲き盛る無憂樹の下で釋迦が降誕した時は、花降り天よりは龍下つて、その産湯は馥郁として芳香を放つたと言ひ傳へられてゐる。

(四) 人生を超越せる崇高偉大なる、いみちきものゝ香り高い文である。深い文である。それだけに難解な文であるから出來得る限り解り易く解釋してやらねばならない。そして他の文の様に其の語句、章句に餘りにこだはつたり、又その様な、考査を行つたりすることは、この高い深い文を、又この文からうけた美しい淨らけき浸潤を攪亂させる

惧がある。たとへば「いろは」の歌の如き一々の語句についての説明はさけたいものである。

「羅刹」はアボウラセツ(阿防羅刹)阿防羅刹(佛)阿防は「獄卒」の義、牛頭人首にして兩脚は牛蹄なり、力壯にして能く山を排し、剛鐵劍を持す。羅刹(梵 *Rakshas*)は鬼、食人鬼、速疾鬼等と譯す。八部鬼衆の一なり。智度論に云く、「入險難處中有羅刹以手遮之」と又十王經には「防羅(阿防羅刹)取於罪人」とある。

「帝釋天」天竺の神、三十三天の主にして、其の居處を喜見城といふ。

「尊者」徳、行、智、の具備した佛徒の尊稱、これ等も極めて平易に説明してほしい。

(五) 次に、文の章句についてしらべて見よう。

「長い間の難行苦行に」露身風體、澄明な悟道に達するための修業である。

「言知れぬ喜びが」悟の道に光を見出しかけたのである。

「いや／＼彼とても……」相手は、おそろしい人食鬼であらうと教へを受けようとする敬虔な心であつてこそ悟の境地に達したのである。

「羅刹はとぼけたやうに」あくまで無知邪障である。

「どうせ死ぬべき此の體を捨て、永久の命を得よう」大悟とはこれである。永久の命を信する事である。釋迦はこの時すでに有爲の奥山を越えたのである。自ら、その境地に入つてこそ、御佛の言葉が解けたのであつた。無我の境、これこそ悟の境地である。この文の深きを味はふべきである。

「生死を超越してしまへばもう淺はかな夢も迷もない」身をもつて體驗した釋迦である故にその深い意味が、はつきりと解つたのであつた。

「此の喜びをあまねく世に分つて人間を救はねばならぬ」宗教である。なやみ多き人間に幸福と安心と慰藉を與へるのである。人間が、人生に超越せる崇高偉大なる或るものを畏敬する感情に起因し、これを人格化して崇拜し信仰し、人生の缺陷を補はうとするのである。

「書き終ると彼は手近にある木に登つた」釋迦の終焉である。そして釋迦の永生である。釋迦はこの時より永劫に生きたのである。

「木は枝や葉を震はせながら」菩提樹は枝葉を戦かせて永劫の幸を語つた、天上より、散華、散華、そして妙なる音楽。

かうして諸々の尊者、多くの大人たちの禮拜の裡に、佛教なる一つの宗教が生れたのである。

(六) 佛教はこの様に印度に於て釋迦が始めた教へである。日本では人皇第四代懿德天皇の御頃、支那では孔子の居た頃であつた。この教へは印度を中心に諸方にひろがり、支那、朝鮮を経て二十九代欽明天皇の時日本につたはつた。

奈良朝時代には非常に盛んになり今にのこる佛閣が出来(奈良参照)平安時代になつて、最澄、空海等の僧が出て深く研究したのであつた。

(七) この教の「いろはにほへと」は、我が國の國語音の基本である。

朗讀

本文

ダイ ジューシチ、シユキョージャト ラセツ。

イロワ ニオエド チリヌルオ。

ワガ ヨ タレゾ ツネ ナラン。

ドコカラカ キコエテ クル トトイ コトバ、ウツク

シー コエ

トコロワ セツセンノ ヤマノ ナカデ アル、ナガイ

アイダノ ナンキョー ク ヨーニ、ミモ ココロモ

ツカレキッタ ヒトリノ シユキョージャガ、フト コノ

コトバニ ミミオ カタムケタ。

イー シレヌ ヨロコビガ、カレノ ムネニ ワキアガ

ツテ キタ、ビョーニンガ リョーヤクオ エ、カッシャ

朗讀上の注意

○「山」のアクセントは一般にはヤマであるがこゝでは助詞「の」を伴つたため平板式となる。

〔参考〕

ミ(身・實・巳)

ミ(箕)

エ(得・繪・餌)

エ(柄)

ガ セーレーナ ミズオ エタノニモ マシテ、オーキナ  
ヨロコビデ アツタ。

イマノワ ホトケノ ミコエデ ナカッタローカ。  
ト、カレワ カンガエタ。シカシ、ハナワ サイテモ タ  
チマチ チリ、ヒトワ ンマレテモ ヤガテ シヌ、ムジ  
ヨ一ワ セー アル モノノ マヌカレナイ ウンメーデ  
アル、ト ユー イミノ イマノ コトバ ダケデワ、  
マダ ジューブンデ ナイ、モシ アレガ ホトケノ ミ  
コトバデ アレバ、ソノ アトニ ナニカ ツズク コト  
バガ ナクテワ ナラナイ、カレニワ ソー ユー フー  
ニ オモワレテ キタ。

○「今のは……らうか」は心の中でさう思った  
のであるから稍小さくいつた方がよい。

〔参考〕  
ムジヨ一 (無常・無情・無上)

○「生ある」と續けていふ時アルのアクセント  
はあまり高くない。

〔参考〕

アタリ (四邊)  
アタリ (當)

○「見廻したが」はミマーシタガと誤り易いか  
ら注意を要する。

シタ ラセツノ イルノニ キガ ツイタ。  
コノ ラセツノ コエデ アツタローカ。  
ソ一 オモイナガラ、シユギョージャワ ジット ソノ  
モノスゴイ ギョ一ソ一オ ミツメタ。  
マサカ コノ ムチ ジャケンナ ラセツノ コトバ  
トワ オモエナイ。  
ト イチドワ ヒテ一シテ ミタガ。  
イヤイヤ、カレトテモ ムカシノ ミホトケニ、 オシ  
エオ キカナカッタトワ カギラナイ、ヨシ アイテ  
ワ ラセツニモ セヨ、 アクマニモ セヨ、 ホトケノ  
ミコトバト アレバ キカネバ ナラヌ。  
シユギョージャワ コ一 カンガエテ、シズカニ ラセツ  
ニ トイ カケタ。

イッタイ オマエワ ダレニ イマノ コトバオ オシ

エラレタノカ。オモニ ホトケノ ミコトバデ アロ  
 ー。ソレモ マエ ハンブンデ、マダ アトノ ハンブ  
 ンガ アルニ チガイ ナイ。マエ ハンブンオ キー  
 テサエ。ワタクシワ ヨロコビニ タエナイガ、ドーカ  
 ノコリオ キカセテ。ワタクシニ サトリオ ヒラカ  
 セテ。クレ。

スルト。ラセツワ トボケタ ヨーニ。

ワシワ ナニモ シリマセンヨ。ギョージャサン。ワシ  
 ワ ハラガ ヘツテ オリマス。アンマリ ヘツタノデ

ツイ ウワゴトガ デタカモ シレナイガ、ワシニワ

ナニモ オボエガ ナイノデス。

ト コタエタ。

シユキョージャワ イッソー ケンソソナ ココロデ

イッタ。

○「半分」が副詞に用ひられた場合のアクセントは平板式となる。

○「とぼけたやうに」と續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くない。

○「何も知りませんよ」の終は軽く上り調子にいふがよい。

○「腹がへつてをります」と續けていふ時、オリマスのアクセントはあまり高くない。

〔参考〕

コタエタ (答へた)

コタエル (答へる)

コタエ (答)

オコタエ (お答)

ワタクシワ オマエノ デシニ ナロー。シユーセーノ  
 デシニ ナロー。ドーカ ノコリオ オシエテ イタ  
 ダキタイ。

ラセツワ クピオ フツタ。

ダメダ。ギョージャサン。オマエワ ジブンノ コト

バツカリ カンガエテ ヒトノ ハラノ ヘツテ イル

コトオ カンガエテ クレナイ。

イッタイ オマエワ ナニオ タベルノカ。

ピツクリ シチャ イケマセンヨ。ワシノ タベモノト

ユーノワネ。ギョージャサン。ニンゲンノ ナマニク。

ツレカラ ノミモノト ユーノガ ニンゲンノ イキチ

サ。

ト ユー ソバカラ サモ クイシンボーラシク ラセツ

ワ シタナメズリオ シタ。

○「だめだ」は稍早目に強く言ひ切るやうにいふ。

○「いけませんよ」の終は上り調子にいふがよい。

○「たべ物」は「タベモノ」ともいふ。

○「いふのはね」の終も上り調子にいふがよい。

○「行者さん」の次の間は心持ち長くするがよい。

○「わしのたべ物」は憎々しくいふ口ぶりがあらはれるやうにやゝゆつくりいふがよい。

## 讀本指導と朗讀法

シカシ シュギョージャワ スコシモ オドロカナカッ  
タ。

ヨロシ、アノ コトバノ ノコリオ キコー、ソー  
シタラ ワタクシノ カラダオ オマエニ ヤツテモ  
ヨイ。

エツ、タツタ フタ モンク デスヨ、フタ モンクト  
ギョージャサンノ カラダト トリカエテモ ヨイト  
ユーノデスカイ。

シュギョージャワ ドコマデモ シンケンデ アツタ。

ドーセ シヌベキ コノ カラダオ ステテ、エーキユ  
ーノ イノチオ エヨート ユーノダ、ナンド コノ  
ミガ オシカロ。

コー イーナガラ、カレワ ソノ ミニ ツケテ イル  
シカノ カワオ トツテ、ソレオ チジョーニ シータ。

○「よろしい」は少しも動かない修行者の心持をあらはす爲、やゝゆつくり重々しくいふがよい。

○「えつ」は語尾を上げる氣持で稍強くいふがよい。

○「二文句ですよ」の終は上り調子にいふ。

○「よいと」は力をこめて稍早くいふがよい。

○「いふのですかい」の終は上り調子。

○「どこまでも」は場合によつてはドコマデモともいふ。

○「おすわり下さい」を別々にいふ時、アクセントはオスワリ クダサイとなる。

サー、コレエ オスワリ クダサイ、ツツシンデ ホト  
ケノ ミコトバオ ウケタマワリマシヨ。

ラセツワ ザニ ツイテ、オモムロニ クチオ ヒライ  
タ、アノ オソロシ、ギョーソーカラ、ドーシテ コン  
ナ コエガ デルカト オモワレル ホド ウツクシー  
コエデ アル。

ウイノ オクヤマ キョーコエテ。  
アサキ ユメ ミジ エイモ セズ。  
ト ウタウ ヨーニ イー オワルト。

ト イツテ

シユギョージャワ ウツトリトシテ コノ コトバオ

メオ ヒカラセタ。

〔参考〕  
メ(芽・目)

讀本指導と朗讀法

キキ。ソレオ クリカエシ。クチニ トナエタ。スルト。  
 セーシオ チョーエツシテ シマエバ。モー アサハカ  
 ナ ユメモ マヨイモ ナイ。ソコニ ホントーノ サ  
 トリノ キョーチガ アル。

ト ユー フカイ イミガ。カレニ ハツキリト ウカン  
 ダ。ココロワ ヨロコビデ イッバイニ ナツタ。

コノ ヨロコビオ アマネク ヨニ ワカッテ。ニンゲ  
 ノ スクワネバ ナラヌト カレワ キズイタ。カレワ  
 アタリノ イシト イワズ キノ ミキト イワズ。イ  
 マノ コトバオ カキ ツケタ。

イロワ ニオエド チリヌルオ。

ワガヨ タレゾ ツネ ナラン。

ウイノ オクヤマ キョー コエテ。

アサキ ユメ ミジ エイモ セズ。

○「一ばい」のアクセントは充滿の意の場合は  
 平板式であるが、分量の單位をあらはす時  
 はイッバイといふのが正しい。

カキ オワルト。カレワ テジカニ アル キニ ノボ  
 ッタ。ソノ テツペンカラ ミオ トージテ。イマヤ ラ  
 セツノ エジキニ ナロート ユーノデ アル。

キワ エダヤ ハオ フルワセナガラ。シユギョージャ  
 ノ ココロニ カンドー スルカノ ヨーニ ミエタ。シ  
 ユギョージャワ。

イチゴン ハンクノ オシエノ タメニ。コノ ミオ  
 ステル ワレオ ミヨ。

ト タカラカニ イッテ。ヒラリト ジュジョーカラ ト  
 ンダ。

トタンニ タエナル ガクノ ネガ オコッテ。ホガラ  
 カニ テンジョーニ ヒビキ ワタッタ。ト ミレバ ア  
 ノ オソロシー ラセツワ。タチマチ タンゴンナ タイ  
 シヤクテンノ スガタト ナッテ。シユギョージャオク

○「ならうといふので」と續けていふ時、ユー  
 ノデのアクセントはあまり高くない。

〔参考〕

ハ(葉)

ハ(齒)

○「するかのやうに」と續けていふ時、ヨーニ  
 のアクセントはあまり高くない。

〔参考〕

ネ(音・値・寝・子)

ネ(根)



ーチヌーニ ササゲ、ソーシテ ウヤウヤシク チジョー  
 ニ アンチ シタ。  
 モロモロノ ソンジャ、オークノ テンニシタガ ア  
 ラワレテ、シユギョージャノ ソツカニ ヒレフシナガラ  
 ココロカラ ライハイ シタ。  
 コノ シユギョージャ コソ、タダ ヒトスジニ ミチ  
 オ モトメテ ヤマナカッタ アリシ ヒノ オシヤカサ  
 マデ アツタ。

○「安置」はアンチともいふ。

## 指導概要

## (一) 教材

- (1) 本文は指導観でも述べた様に非常に難解な文であるから、先づ本課の読みに入る前に一通りの豫備知識を與へる事が必要である。とにかく兒童の生活とは遠い精神的な内容の教材であるから、兒童に最も親しい甘茶の祭り、花の日の話から、釋迦降誕と幻想的に導きつゝ、次第に宗教的雰囲気をかもし出して來るのである。そしてお釋迦様が人間界のなやみを救はうと修業をしたのである事から本文に入る。
- (2) 兒童に體驗的に讀ませる事は不可能であるが、この文を讀むにつれて自ら或る、崇高なる、偉大なる、清純な

る境地に引き入れられて行く。兒童は大人が感ずる様な境地にすべてが引き入れられるとは思はないが語句の理解を進めつゝ幾度も幾度も讀み耽らせて、兒童のもつ鋭敏にして純真なる宗教的情操を喚び起さなければならぬ。

- (3) 十頁に渡る比較的長文であるが、夢幻的な物語としてすぢが進行してゐるから、兒童も難解な割合に、興味深く讀む事と思ふ。第一次の讀としては、渴、悟、謹、食、妙の五字で、さしてむづかしくはない。
- (4) 内容的には深いから、其の點十分注意し、指導者自らが敬虔な心で説明してやらなければならぬ。語句としては、修業者、羅刹、尊い言葉、難行苦行、無常、運命、無知じやけん、悟、永久の命、生死、超越、夢、迷、帝釋天、尊者、道を求める、等、哲學的宗教的なのが多いから、出来るだけ解り易く説明して、よく味はせなければならぬ。
- (5) 色は匂へどの歌の意味は、文中説明のまゝにして、有爲の奥山等と一つ一つについて、究める必要はない。
- (6) 最後にこのいろは歌と、五十音について、一致せる事と、佛教についての知識を授ける。

## (二) 挿畫

百十六頁の上は、菩提樹上に合掌して「一言半句の教のために、此の身を捨てる我を見よ」と高らかに言つて散華の利那の悟道の御姿釋迦である。

百十六頁の左下は羅刹の繪で、共に法隆寺の玉蟲の御厨子の下に畫かれてゐる繪をその儘に轉載されたものである。

## 第十八 歐洲めぐり

### 一 要旨

ロンドン、パリ、イタリアの古都、ベルリンと英、佛、伊、獨の各國代表都市を訪ねて、各國各様の情緒を味ははせると共に、地理的に歴史的に人種的に見識を廣めて、世界文化の進展に目覺めしめ、且つ日本との國際問題をも意識させる。

### 二 指導観

(一) 本文はロンドン、パリ、イタリアをめぐりて、ベルリンの四部に分れてゐる。各都市の街路、交通、建築、風光等を通じて文化と國民性が描かれてゐる。

### (二) ロンドン

英京ロンドンと言へば霧の都として有名である。冬期は特にひどく、晴々した天氣は殆どなく、四五十日間も太陽を見ない事さへ珍らしくない。さて本文は、第一段街路交通、第二段及第三段に建築物、第四段は公園について書かれてゐる。

#### (1) 第一段

「街路は曲りくねつて……狭い歩道……不規則に射出……」古きを貴び新しきを追はぬは英國人の特徴であるが、この保守的な觀念が今日ロンドン市街の改良を阻害してゐるのであらう。古い寺、古い建物、無數の記念

物を偏重するため、市街の整理がつかず、不整頓な街路は曲りくねつて、廣くなつたり狭くなつたりしてゐるのである。國民性の表れの一つである。

「二階附の乗合自動車」保守的なため、在るものは成るべく毀はさないで使ふ國民である。挿畫にもある様に舊式な大型タクシーや馬車まで、ロンドンの中心を交通してゐるのである。

「人の波・車の波が刻々と……」次から次と湧いて来て、又、すん／＼過ぎ去る様子、さながらの表現である。「それでゐて交通整理がうまく行く」英國は世界一の紳士國と言はれ、禮儀正しいから公德がよく守られてゐる故であらう。

#### (2) 第二段、三段

「大英博物館を始め大きな博物館」二三を上げれば科學博物館、ナチュラル・ヒストリー博物館、アルバート・ビクトリア博物館等、「國會議事堂」……「建物の偉觀は前者」とある如く建築美の粹として英國人の誇である。「ウエストミンスター寺院」千年も昔の建築で、英國歴代皇帝が御即位式を挙げられる有名な寺院である。ナ・イチングールやニュートンの墓及世界大戰に於ける無名戦死者の墓もある。

#### (3) 第四段

「公園」自然を愛するのは人情の常である。自然は安息の母體である。英國では日曜の休養が徹底的に行はれてゐる。日曜の安息日にはすべての人々が課業から解放されて朝から楽しく公園や郊外へ出かけて休養するのである。従つて公園が多いのであらう。

### (三) パリ

#### 第十八 歐洲めぐり

都市美の都、藝術の都、數限りなき寺院、官殿、偉大なる歴史的記念物、そして雅麗な行人、巴里は花の都である。世界のキャピタルである。

(1) 第一段

巴里の都市計畫はナポレオン三世時代（一八五二頃）に出来たと云ふ事であるが、放射状式都市計畫の典型的なもので、街路、廣場、公園の全體が一個の藝術品と言ふ觀がある。

(2) 第二段

世界一と稱せられるコンコルドの大廣場を中心に八方へ走る廣い街路は、自動車時代の今日も尙狹隘を感じない程で、市中を東西南北に走る自動車は殆んど全部が此の廣場に集まつて捌かれて行く。凱旋門も一つの巴里交通の中心で此の圓形廣場からは十二本の幹線街路が放射状に走つてゐる。これ等の街路から廣場へ集まつて来る無數の自動車は、凱旋門の廻りを右廻りに、ぐる／＼廻つてゐるが、それが夫々、十本の街路へ振り分けられて行く様は恰度遠心力ではね飛ばされて行く様でもあり、又「花に飛びちがふ蜜蜂の群」を見る様でもある、右廻りで左廻りが出来ないから隣の通りへ入るにも凱旋門を一周せねばならぬ場合もあるが、すべて同一方向に廻つて自然の中に捌かれて行くので、交通整理の必要がない。

(3) 第三段

都市の美觀を誇るパリーを二段で紹介し、次いで藝術の都としてのパリーを紹介してゐる。昔の王宮ルーブル美術館、ぎつしり並んだ歐洲の名畫、ルクサンブル美術館の美術の粹、春の美術展覽會、冬の夜のオペラ、すべて見るやうである。

(三) イタリヤをめぐりて

空碧く水澄める佳境、イタリヤは美術の國、音樂の國、詩の國である。しかしローマ、ナポリ、ミラン、ゼノア、フロレンス、ベニス等、歴史にかゞやく古都を始め、伊太利全土、今は新興の意氣にもえ立つて居る。ファシストがそれである。このファシストの活躍は僅か十年來の事である。伊太利が既成政黨の腐敗墮落の爲め滅亡に瀕した時愛國詩人ダマンチオが奮起して全國民に叫びかけた。「祖國伊太利を救ふものなきか、青年よ、起つて祖國の危急を救へ」と。この時、その聲に應じて、起ち上り、祖國愛護の運動を起したのが、無名の青年ムツソリーであった。彼は忽ちにして農民の間にファシスト黨を結成した。ファシストと言ふのは、ファッショの結合の人々である。このファッショは、ローマ共和政時代の表象で、元首を中心に人民が一致團結して國家を建設するといふ意味である。ファッショはローマ建國の精神である、伊太利獨特の國家的精神である。我が國の一君萬民の大精神が我が國獨特の國家的精神である如く。本文では、この新興伊太利の姿を識らせると共に、この精神が日本と結んだ防共協定の國交關係を、よく理解させねばならない。伊太利青年が、日本語を學ぶところに、又面識もないこの作者との間の親しみに兩國間の親密さがにじみ出てゐるのである。昭和十二年、防共協定が結ばれ、翌十三年三月には、パウルクチ侯一行の親善使節が我が國を訪れたのは、まだ記憶に新しいところである。

(1) この文は前のロンドン、パリーの二文とは異つて、いくつかの古都と青年を描いてゐる。そして前二文の客觀的な書き方にひきかへ、作者自身を文の中に出してゐる。

第一段で伊太利の風光を、第二段では古都を知らせ、第三段で、新興伊太利の姿を見せ、第四段の最後に親日の喜びを語つた文である。

(2) 「ローマ」ローマの建設は紀元前七八百年頃で、世界永遠の都と稱せられた。水がよく水道も古代より出来てゐて街角や廣場には大噴水があつて水と彫刻の美を誇つてゐる。大ローマ帝國の全盛時代は二世紀頃で當時ローマ市の人口は百萬を超えてゐた。その後盛衰興亡を繰り返へし、今日では人口五十萬の伊太利の首府である。「フロレンス」とは花の都と言ふ意味である。古い都で今も尙全歐洲に於ける美術彫刻繪畫の中心地である。「ベニス」汽車は海中の淺瀬にかゝつた橋上を走つて行く。ベニスの街は陸より二哩半の海中に在る。汽車の上から街を眺むれば建物は、まるで海中に浮いて流れてゐる様である。ベニスは淺瀬の上に出來た街で亂世には要害の地であつたが、今は只名所となつて近代都市としての繁榮はない。「ミランの大寺院」はデユオモ寺院と言ふ。五十間に八十間と言ふ大伽藍で、全部白大理石で造られ壯麗無比である。エレベーターで屋根の上に出て塔の石段を旋廻して登れば三百フィートの頂上よりアルプスの連山もミランの全市も一眸の内に見る事が出来る。最後の親日の喜びのところは別に困難な所はないから十分に味讀させるがよい。「私は何とも言へぬ嬉しさを感じて彼の手を握つた。」これこそ、誠の情である。自然ににじみ出るこの心情こそ、日伊親善の眞隨である。

(四) ベルリン

國語讀本卷十二が發行され、この新教材が載せられた夏、はる／＼獨逸の地から若き盟友ヒットラーユーゲントを迎へた事は何と言ふ喜びであらう。そして又はるか獨逸の地には我が青年日本の選士等が親善の使命を果したのである。新興の意氣に燃える若きドイツと、潑刺たる青年日本と輝やかしき交歡、防共の誓ひに、燦然たる世紀の進展を見る

ことであらう。まことに意義深い教材と言ふべきである。

日獨防共協定は昭和十一年十一月二十五日に公表された。この協定は世界を毒する共產インターナショナル即ちコミンテルンを防がうといふのである。今この赤化の魔手は、露國より支那を通じて我が國へ差しのべられてゐるのである。日、獨、伊三國かたき誓ひのもとに、世界を正しき平和に導かなければならない。

(1) この文はベルリンの市街に動くドイツ國民の姿を寫したものである。ナチス黨のヒットラー政治によつて革新された張り切つたドイツ國民の姿である。

文の内容は大略三つに分かれる。第一は、ハーゲンクロイツ（かぎ十字）を輝やかすヒットラー青少年、こゝに新興ドイツの姿を知り、第二に大地を愛し森林を慕ふドイツの國民性を見出し、第三に町のとある食堂で親日の眞情にふれたのである。

(2) 「ヒットラー青少年團」ヒットラーを總統とする全ドイツの青少年を言ふ。幸今夏、來朝のヒットラーユーゲントは、日本全國を歴訪して居るから、實際に接し或は新聞等で熟知のことと思ふ。

「街路はきれいに洗ひ清められ」勤勞報國こそ彼れらの精神である。こゝにも若きドイツの姿が見える。

「國際飛行の中心都市」テンベルホーフ飛行場は宏大なる空の港として離陸着陸に追がない。

「大地を慕ひ森林を慕つて」ドイツ人は森の民族と言はれ非常に森林を愛する、日本と同じである。

「食卓にすわつてゐた夫婦の客が……」

「樂長がつか／＼と私のそばへ來た」こゝに相呼ぶ兩國の魂があり、日本固有の傳統が相よつたのである。

「荒城の月が滿堂を歴してゆるやかに流れ始めたのであつた」感激である。この荒城の月の曲の中に獨逸人が

日本人によせるいみちき發想が情愛がこめられてゐたにちがひない。そしてその發想は情愛はいんくとして  
なみ居る人々の心に深くとけ入つた事であらう。

本文

朗讀上の注意

ダイ ジューハチ。オーシユー メグリ。

ロンドン。

ガイロガ マガリ クネツテ イル。アミノメノ ヨー  
ニ イリクンデ イル。ソノ アイダオ。ガツシリ シタ  
ニカイ ズキノ ノリアイジドーシャガ オスナ オス  
ナデ ツメカケル。セマイ ホドーワ ヒトモ アフレン  
ー。ロンドンノ シンゾート ユー シチーノ ガイジョ  
ーワ。マツタク メマグルシー ホドダ。ナカデモ シチ

○「綱の目のやうに」と續けていふ時、ヨ一ニ  
のアクセントはあまり高くならない。

〔参考〕

ホドー (歩道)  
ホドー (輔導)

ヨ一 コーテート トリヒキジヨト。イギリス ギンコー  
トガ トリカコム ヒロバワ。ロンドン ダイ イチノ  
コーツ一ノ ナンショデ アロー。コノ ヒロバオ チユ  
ーシント シテ。スコブル フキソクニ シャシユツ ス  
ル ナナツノ ガイロオ。ヒトノ ナミ クルマノ ナミ  
ガ コツコクト オシヨセル。クルマワ イカニシテ コ  
ノ グンシユーオ キリ ヌケテ ススムカオキズカイ。  
ヒトワ マタ。イカニシテ コノ オビタダシー クルマ  
ノ ナガレオ。ヨコキルカオ カンガエネバ ナラヌ。マ  
ツタク イキ ズマル ヨ一ナ コーケーデ アル。ソレ  
デ イテ。コーツ一 セーリガ ンマク イクノニ ツ  
クズクト カンシン サセラレル。

ロンドンニワ ダイエー ハクブツカンオ ハジメ。オ  
ーキナ ハクブツカンヤ ビジュツカンガ アツテ。ソノ

〔参考〕  
コーテ一 (公邸・皇帝・肯定・高低・行  
程・坑底)

○「不規則」はフキソクともいふ。

○「進む」と單獨にいふ時のアクセントは平板  
式である。尙第一音節のスの母音を無聲化  
させない方がはつきりする。

○「息づまるやうな」と續けていふ時、ヨ一ナ  
のアクセントはあまり高くならない。

讀本指導と朗讀法

ヒトツノ ケンブツニサエ イチニチャ フツカワ カ  
 カリ、ホトンド アシガ ボーニ ナルノオ カンズル。  
 シカシ、ソノ ホーフナ レキシテキ イブツ。セカイテ  
 キ メーサク、ヒョーホン、モケー トーノ チンレツニ  
 ヨツテ、ワレワレワ セカイノ レキシ、イギリスノ  
 レキシ、ロンドンノ レキシ、オーシユノ カイガシ、  
 イギリスノ カイガシ ナドオ、サナガラニ シル コト  
 ガ デキルノデ アル。

テームスガワノ ホトリニ ドードータル コツカイ  
 ギジドーガ アリ、ソノ チカクニ ウエストミンスター  
 ジーンガ アル、タテモノノイカンワ ゼンシヤニ  
 アローガ、レキシ ユカシーノワ コーシヤデ アル、ソ  
 コニワ、イギリスガ ウンダ コーエー アル、セージカ、  
 ガクシヤ、シジン、ブンガクシヤ、ハツメーカ トーノ

○「一日」が副詞として用ひられた場合、アクセントは平板式となる。

〔参考〕  
 ホーフ (豊富)  
 ホーフ (抱負)

○「知ることが」を別々にいふ時、アクセントはシル コトガとなる。

○「ウエストミンスター」のウエを二音節にいはないやうに注意を要する。

〔参考〕  
 イカン (偉観)  
 イカン (偉観・遺徳・尉官)  
 コーシヤ (後者・校舎)

ハカガ イツポ イツポニ ソンザイシ、カレラオ キネ  
 ン スル ビジニツテキナ チョーゾーガ ヘキメンニ  
 ソーテ ナランデ イル、マチト ユー マチワ、ザット  
 ーシテ イルガ、シカシ ロンドンニワ ダイショーノ  
 コーエンガ オーク、イタルトコロニ デンエンテキナ  
 シゼンオ クリヒロゲテ イル、ホー スーキロメート  
 ルノ ダイ コーエンニ ハイルト、ワレワレワ ムゲン  
 ノ シゼンノ ナカオ サマヨー キガ スル、シバフオ  
 ツタイ キノ シタミチオ ツタイ、イケノ ホトリオ  
 タドリナガラ スージカン アルイテモ コーエンノ  
 ハシオ ミナイ コトガ アル、ソーシテ コレダケノ  
 カズト コレダケノ ヒロサガ アレバコソ、ヨシ ニチ  
 ヨービノ ゴゴデ アツテモ、コーエンワ ユーユータル  
 シゼンノ オモムキオ ウシナワヌ、ダイ コーエンノ

○「一步」と單獨にいふ時のアクセントはイツポである。

○「至る所に」はイタルトコロニともいふ。

○「公園」と單獨にいふ時のアクセントは平板式である。

〔参考〕  
 キ (氣・黄)  
 キ (木・奇)

○「見ないことが」と続けていふ時、コトガのアクセントはあまり高くない。

○「廣さ」はヒロサと平板式にいつてもよい。

○「午後」はゴゴともいふ。

讀本指導と朗讀法

オクエ ハイルト、ヒトカゲオ ミナイ シゼンキョー  
オ サエ、サガシダス コトガ デキルノデ アル。

バリー。

バリーニ キテ ウレシーノワ、スツキリシタ ガイロ  
デ アル。コノ ガイロオ スーソーノ ユービナ コー  
ローガ、スベテ ハクシヨクノ ヨソオイオ モツテ カ  
ザツテ イル。ジドーシャデ ハシルト、イクセン イク  
マントモ シラス ウツクシー マドガ ワレワレノ コ  
コロオ ソソル。トキドキ オードーリワ、カワジリガ  
サンカクスオ ハサンデ ワカレル ヨーニ、エーカクニ  
ブンキシ、ソノ ブンキテンニ タツ コーローガ、ヒ  
トキワ ユーレーニ アオガレル。マタ ナミキノ ウツ  
クシー オードーリオ マツスゲニ ハシルト、ソノ イ  
ツタンニ フンスイヤ カダンノ アル ヒロバガ アリ

○「探し出すことが」及び「出来るのである」を  
それ／＼続けていふ時コトガ及びアルのア  
クセントは何れもあまり高くならない。

○「優美な」はユービナと平板式にいつてもよ  
い。

〔参考〕

- ユーレー (優麗)
- ユーレー (幽靈)
- イッタン (一端・一旦)
- イッタン (一旦)
- イッタン (一反)

ヒロバオ チューシンニ シテ オードーリガ ゴホー  
ロツポーエ ホーシャ スル。

ナカンズク コンコルドノ ヒロバカラ、シャンゼリゼ  
ーノ オードーリオ スキテ、ナボレオンノ ガイセンモ  
ンニ イタル ビカンワ、ナント イツテモ セカイイ  
チノ ナニ ハジナイ。コノ ガイセンモンオ チューシ  
ンニ、ジューニホーエ シャシユツ スル ガイロオ、キ  
バヤナ バリーコオ ノセタ イクジューダイ イクヒヤク  
ダイノ ジドーシャガ、アトカラ アトカラ シツク ス  
ル。ジューニホーカラ ガイセンモンノ ヒロバニ アツ  
マツテ、ジューニホーニ チツテ イクノガ、ハナニト  
ピチガウ ミツパチノ ムレオ オモワセル。ミルカラニ  
ムネガ スク ヨーナ キガスル。  
トシノ ビカンオ ホコル バリーワ、マタ ゲージュ

〔参考〕

- チューシン (中心・衷心)
- チューシン (忠臣・注進)

○「すくやうな」を別々にいふ時、アクセント  
はスク ヨーナとなる。

ツノ ミヤコトシテ シラレテ イル。ムカシノ オーキ  
 ニーデ アッタ ルーブルワ。イマ ハクブツカント ビ  
 ジュツカンニ ナツテ イルガ。ソノ ビジュツカンオ  
 ゴク ザツト ミルニ サエ。スクナクトモ フツカヤ  
 ミツカワ カカロ。フランスワ モトヨリ。オーシユー  
 カイガノ メーサクガ シツカラ シツエ。ギツシリト  
 ナランデ イル。コノホカ ルクサンブル ビジュツ  
 カンニモ ビジュツノ スイガ ミラレル。ハルワ ユー  
 メーナ ビジュツ テンランカイガ ヒラカレ。フユノ  
 ヨワ カゲキ ゲキジョーノ マドガ コーシノ デント  
 ーニ ニオツテ。トジンノ ココロオ ソソル。アラユル  
 リニューコーノ サキガケオ スルノモ。マタ バリーダ  
 ト イワレテ イル。

イタリヤオ メグリテ。

〔参考〕  
 オーキユー (王宮・應急)

〔参考〕  
 スイ (粹・酸い)

○「美術展覧會」を二語としていふ時のアクセ  
 ントはビジュツ テンランカイである。

〔参考〕

コーシ (紅紫・孝子・講師・公使・公  
 私・嚆矢)

コーシ (格子・孔子)

イタリヤオ リョコーシテ イルト。ドコカ ニツボン  
 ニニタ トコロガ アル。ヤマ。カワ。ウミ。ヘーゲン  
 ガ テキトーニ イリマジツテ。イタルトコロニ ニツポ  
 ンテキナ フーケーオ テンシュツ スル。トクニ ソラ  
 ト ウミトガ ホガラカデ アル。  
 ソノ ウエ キョート ナラオ シノブ ヨーナ コト  
 ガ オーク。ソレラガ スベテ コビジュツオ モツテ  
 ミタサレテ イル。ミランノ ダイ ジーンノ オクジョ  
 ーニ。シロ ダイリセキノ セントー クジューハチホン  
 オ アオギ ミル スバラシサ。ゼノアニワ コロンプス  
 ノ イエガ アル。ローマニワ セカイ ダイ イチノ  
 ダイ ガラント ユー セントピーター ジーンヤ。ロー  
 マ ホーオーノ パチカン キューデンガ アリ。ムカシ  
 ノ ローマノ イセキガ アル。コーフーケーオ モツテ

○「朗かである」と続けていふ時、アルのアク  
 セントはあまり高くない。

○「しのぶやうな」と続けていふ時、ヨーナの  
 アクセントはあまり高くない。

○「白大理石」を別々にいふと、アクセントは  
 シロ ダイリセキとなる。

〔参考〕  
 イセキ (遺跡・井堰)



讀本指導と朗讀法

タタエラレル ナボリワ、ワガ カゴシマシノ ケシキ  
 ニニカヨッタ トコロサエ アッタ。  
 ダガ イマノ イタリヤワ シンコーノ イキニ モエ  
 テイル。ミラン。ローマ。ナボリワ。コトトシテ ヨリ  
 モ デンダイ トシトシテ。サイキンノ カツドニーメ  
 ザマシー モノガ アル。ロンバルジャ ヘーゲンニワ。  
 モー ノーソン ヒヘーノ コエガ ナイト ユー。オモ  
 ナ テーシャジョーニワ。クロシャツノ セーネンガ  
 ミハリオ シテ。タビビトノ アンゼンオ ハカツテ イ  
 ル。ユライ メーシヨニワ スリヤ コジキガ オーイ。  
 イタリヤモ カツテワ ソノ レーニ モレナカッタガ。  
 イマワ ホトンド ソノ アトオ タツテ シマッタ。コ  
 クミン スベテガ キンチョー シタノデ アル。  
 フローレンスニ イタリヤノ コビジュツオ タズネテ

○「旅人」のタビビト又はタビビトもいふが、こゝでは助詞「の」を伴つてもゐるから平板式にいつた方がよい。

○「由来」及び「名所」のアクセントは共に平板式にいつてもよい。

〔参考〕  
 レー (例・靈・零・令・證 || 敬證)  
 レー (證 || 謝證)

カラ、ベニスエ ムカオート スル キシャチヌーノ コ  
 トデ アッタ。モー ヨホド モクテキチエ チカク ナ  
 ッタ コロ。アル エキデ テーシャ スルト。ドヤドヤ  
 ト コノ クニノ セーネンガ シゴニン ハイッテ キ  
 テ。ワタクシノ ソバニ コシオ カケタ。シキリニジ  
 ヤボネーゼ。ジャボネーゼ トササヤクノガキコエル。  
 イタリヤゴオ シラス ワタクシニモ ソレガ ニッポン  
 ジント ユー イミダト ケントーワ ック。スルト ヒ  
 トリノ セーネンガ ワタクシノ マエニ タツテ。  
 アナタワ ニッポンノ カタ デスカ。  
 ト ハツキリ ニッポンゴデ イッタ。イマ。カツコクデ  
 ニッポンゴノ ケンキニューガ サカンデ アル コトワ  
 キーテ イタガ。ヨローロッパニ キテ。ガイコクジンニ  
 ニッポンゴデ ハナシカケラレタノワ コレガ ハジメ

○「どやくと」は「はいつて来て」にかゝる言葉であるから次に間をおかずに讀むがよい。

○「一人の」はいふ迄もなく、その中の一人のといふ意味であるから従つてこの語を強めて讀むのはよくない。

○「方ですか」と續けていふ時、デスカのアクセントはあまり高くない。

○「外国人」はガイコクジンともいふ。

テデ アル。

ソー デス。

ワタクシワ ニッポンゴオ ニネンホド ベンキョーシ  
テ イマス。

カナリ タダシハツオンデ アル。タノ セーネンタ  
チワ。ニコニコ シナガラ ナカバ フシギソーニ。ワタ  
クシト カノ セーネンノ カオオ ミクラベテ イタ。  
カレワ ナオ。ワタクシガ ニッポンゴオ ベンキョー  
シテ イル モノダカラ。ユージンタチガ コノ ニッポ  
ンジント ハナシオ シテ ミヨト イッタノデス。ト  
ユーヨーナ イミノ コトオノベタ。コー コミイツ  
タ コトニ ナルト。コトバワ シドロモドロデ アル。  
シカシ ワタクシワ ナントモ イエヌ ウレシサオ カ  
ンジテ。カレノ テオ ニギッタ。

○「始めてである」及び「さうです」をそれら、  
續けていふ時アル及びデスのアクセントは  
あまり高くない。

○「いふやうな」を別々にいふ時、アクセント  
はユーヨーナとなる。

アナタワ ニッポンゴガ ジョーズデス。モット ベ  
ンキョーナサイ。ソー シテ アナタノ ユージンニモ  
ニッポンゴオ オシエテ オアゲナサイ。  
セーネンモ ウレシソーニ ニニコ ワラツテ イタ。  
ソーガイニワ イツノ マニカ ベニスガ チカズイテ  
イタ。イマ ワタリツツ アル チョーキョーニ ヨツ  
テノミ。ベニスワ リクト ツズイテ イル。ソーシテ  
カナタニワ。オトギバナシノ クニノ ミヤコオ オモワ  
セル ヨーナ マルヤネヤ。セントーノ ソピエル ミズ  
ノ ミヤコガ ウカンデ ミエルノデ アツタ。

ベルリン。

シンコーノ イキワ。ベルリンニ キテ サラニ スバ  
ラシーモノガ アルノオ ミタ。  
ミチ ユク ヒトワ。オトコモ オンナモ キンチョー

○「教へておあげなさい」を別々にいふ時、ア  
クセントはオシエテ オアゲナサイとなる

讀本指導と朗讀法

シキツテ イル。キチント シタ フクソーガ マズ  
 ソレオ モノガタル。ムネオ ハリ ゲンキ ヨク アル  
 ク カレラノ シセーガ ソレオ モノガタル。  
 カギジュージノ ワンシヨオ ツケ。イカニモ キ  
 リット シタ ソロイノ フクソーデ ヒトラー セーシ  
 ヨーネンダンガ ネリアルク。  
 ガイロワ キレーニ アライ キヨメラレ。ホトンド  
 カミクズ ヒトツ オチテ イナイ。ピノ トシ バリー  
 デ サエ。トキニ チラバツタ カミクズオ ミタガ。ド  
 イツジンワ ドコマデモ キレーズキデ アル。  
 コクサイ ヒコーノ チューシン トシトシテ。ベルリ  
 ンニワ サンブンゴトニ リョカツキガ ハツチャク ス  
 ル。サラニ ベルリンオ チューシンニ。コクナイニ シ  
 ツー ハツタツノ ジドーシャ ドーロガ ヒラカレ。ジ

○「如何にも」はイカニモといつてもよい。

○「落ちてゐない」と續けていふ時、イナイの  
アクセントはあまり高くならない。

ドーシャガ スバラシー イキオイデ シツソー スル。  
 シナイニ スム カゾクタチワ。ニチヨーピニ オーク  
 コーガイニ デカケル。モチロン サンボオ モクテキ  
 ト スル モノモ アルガ。カレラノ ナカニワ コーガ  
 イニ イクラカノ コーチオ モチ。チチモ ハハモ コ  
 ドモタチモ。イチニチ ソレオ タガヤス コトオ タノ  
 シミトシテ イルノガ オーイ。キンライワ ソレダケデ  
 マンゾク セズ。ジュータクオ コーガイノ シンリン  
 チタイナドニ イトナム コトガリニューコーシテ。キタ。  
 キンダイ カガクオ カテー セーカツニ オーヨースル  
 コトニ ツトメル カレラガ。イチメンニワ ダイチオ  
 シタイ。シンリンオ シタツテ ヤマヌノデ アル。  
 コーシタ ドイツジンガ ワレワレ ニッポンジンニワ。  
 シバシバ コーイオ ミセテ クレル。

〔参考〕

スム (住む・濟む・澄む)  
カゾク (家族・華族)

○「郊外」はコーガイともいふ。

○「近代科學」及び「家庭生活」をそれ／＼別々  
にいふ時のアクセントはキンダイ カガク  
及カテー セーカツとなる。

アルヨ　ワタクシワ　マチノ　トアル　シヨクドーニ  
 ハイツタ。セキワ　ホトンド　マンインデ　アル。スルト  
 ムコーノ　シヨクタクニ　スワツテ　イタ　フーフノ  
 キヤクガ。テオ　アゲテ　ワタクシオ　サシマネータ。ソ  
 ノ　シヨクタクニ　クーセキガ　アツタノデ　アル。ワタ  
 クシワ　ココロカラ　アリガトー　ト　イーナガラ　セキ  
 ニ　ツイタ。

オリカラ　ココロヨイ　オンガクガ　ドーナニ　ナガ  
 レテ　イル。ワタクシワ　ハコバレテ　キタ　シヨクジ  
 トリナガラ。キクトモ　ナシニ　キキイッテ　イタ。  
 シバラクシテ　ソーガクガ　ヤンダ。スルト　ガクチヨ  
 ーガ　ツカツカト　ワタクシノ　ソバエキタ。ソーシテ。  
 アナタノ　タメニ　ニッポンノ　キヨクオ　ヤリマシヨ  
 ー。

〔参考〕

セキ (席・籍・關・積)  
 セキ (咳)

○「あつたのである」と續けていふ時、アルの  
 アクセントはあまり高くならない。

〔参考〕

ドー (堂・銅・朋)

○「あなたのために」と續けていふ時、タメニ  
 のアクセントはあまり高くならない。

〔参考〕

キヨク (曲・局・極)

指導概要

(一) 教材

(1) 本課は作者が英、佛、伊、獨の各代表都市を訪ねてその各々の特異性を書いて歐洲を代表させてゐるのであつて、四部に分かれ、十九頁に渡る長文ではあり、内容的にも知らせ、味ははせ、意識させなければならぬ事象が非常に多い。それ故、七時間か八時間位配當しなければ十分に讀破出来まいが六時間として立案して見よう。

第一時は全文の通讀概観

第二時は一部、ロンドン

第十八 歐洲めぐり

第三時はパリ

第四時はイタリヤをめぐる

第五時はベルリン

第六時は總括として内容の整理考察

(2) 第一時の取扱は、全文通讀させ、各都市の概觀を知らせて歐洲に對する概念を與へると共に、邸、則、衆、彫、疾、騷、覽、跡、疲、弊、主、由、腕、力 等の新出讀替文字も流滞なく讀める様にして置く。ロンドン、パリ、イタリヤの各都市、ベルリン等の位置を地圖と對照させて置く。

(3) 第二時、ロンドンでは、その街路の有様や、交通整理のうまさや歴史的建築物、公園等について十分讀み取らせる。

第二時パリは、こゝでは都市美の都、藝術の都としてのパリを、特にコンコルドの廣場から凱旋門に至る美觀を寫眞或は繪葉書等により示し、世界無二の、放射狀式都市の事等相當に述べたいものである。

第四時イタリヤをめぐる、風光が日本に似てゐる事、ローマ、ナポリ、ミラン、ゼノア、フロレンス、ベニス等、地圖に對照して知らせ、新興イタリヤの姿と、日本との防共協定の事と其の意味等十分述べ、伊太利國民が日本を識らうとする事を意識させる。

第五時ベルリン、ヒットラー青少年團について若きドイツの意氣と新興ドイツの潑刺たる進展を感知させ、尙ドイツ人の日本人に寄せてゐる好意を讀みとらせ、防共の國際的關係をも識らせなければならぬ。

第六時は總括として全文を呼讀させ内容の整理をすると共に、日本の帝都について兒童の知識を發表させるの

をよす。

(1) 挿 畫

百十八頁、市長公邸と取引所とイギリス銀行とが取圍む三角廣場の寫眞、正面が取引所、右に少し高く見えるのが市長公邸、左の建物がイギリス銀行、最も雜沓する所であるが交通整理が嚴格で交通事故は殆どない。

百十九頁、國會議事堂、河はテムス河、左端に尖塔の見える建物がウエストミンスター寺院である。

百二十頁、ウエストミンスター寺院の寫眞全景である。

百二十二頁、パリ市のコンコルドの廣場手前の絡驛としてゐる道路が凱旋門に通ずるシャンゼリゼー街である。

百二十四頁、パリーの凱旋門、此の門を中心に街路が十二方へ射出してゐる。

百二十六頁、ミラノ寺院、白大理石の非常に美麗な建物である。

百二十七頁、ナポリ港遠方に見える山がベスピオス山である。

百三十一頁、ヒットラーユーゲントのお祭の時の記念行進である。丘鍵十字ハーゲンクロイツが普通は○の中にあるがこの腕章では□の中にある。

百三十三頁、ベルリンの市街、右に見えるのはピアブルの森、獨逸人は森の民族と云はれる程で非常に森を愛する深癖な所は日本人とよく似通つてゐる。

## 第十九リヤ王

### 一 要旨

西洋文學の代表の一つとして、シェークスピア作のリヤ王物語を讀ませる事によつて、西洋精神文化の情趣にふれさせ、西洋文學に對する理解と親しみを養はせると共に、劇文學の形式を識らせる。

### 二 指導観

(一) 本文はウイリヤム、シェークスピアの作である。シェークスピアは、英國エボン河畔の小さな田舎町に生れ、小學教育を受けただけで、二十六歳の頃から劇作に向ひ、文筆を勞する事二十三年の間に長詩二篇、十四行詩百五十篇、劇三十七種を創作し、四十九歳にてペンをすて、隱退、五十二歳で世を去つた。彼の戯曲中有名な物に、ハムレット、ジュリアス・シーザー、ヴェニス商人、マクベス、ヴェローナの二紳士、ローミオとジュリエット等がある。

(二) このリヤ王はリヤ王物語を壓縮し、少年文學として作りかへたものである。次第は東洋道德の色彩を帯び三人の娘にそれ／＼土地を分けてやつたその結果を描いたもので、恩恵を與へた二人の姉嬢にうとまれ、勘當した末娘に介抱されて餘世を送つたと言ふ事を書いたものである。教科書に於ける劇については、いはゆる子供の遊びから出發して、普通の文學の中に入れ、卷十二卷に於て、「末廣がり」を出し、そしてこの「リヤ王」の劇文學をとり入れたのである。

のである。

(三) 文は、四部に分かれてゐる。即ち、第一場、二場、三場、四場となるのである。劇には、人物、時或は時代、場所の三つが必要である。明瞭でなくてはならない。こゝに戯曲形式を書いて見よう。

リヤ王	高齡なる國王
ゴナリル	リヤ王の一番娘
リガン	リヤ王の二番娘
コーデリヤ	リヤ王の末娘
重臣	リヤ王の重臣
フランス王	コーデリヤの婿
侍醫	フランス王の侍醫
その他、家來召使等大勢	

時代 中世紀

場所 イギリスのリヤ王の國土

かくて物語の次第によつて、此人物や場所や時が變るので、場面がいくつかに分かれるわけである。そして一場毎に又適當な情景の解説が必要である。本文の小文字で書いてあるのが、その場の情景の解説である。

(四) この劇は、父王が與へるが故に求め得るといふ考への破綻と、與へられずともこれに報いんとするコーデリヤ

の孝養純愛を織りなして書いたものである。そこに權勢によつて如何ともなしがたい人生の苦惱が伏在するといふ意味を示唆してゐる。これ等の點を出來得る限りよみ取らせたいものである。

(五) 一場、リヤ王宮殿の一室である。リヤ王が三人の娘の心を試さうとしてゐる。

「……そなたたちの口から聞きたい」

「一番孝行の心ある者に最大の恩恵を與へるであらう。」と。

人の眞情は、たくみな言葉によつて、知る事も出來なければ、物質によつてあがなひ得るものでもない。

「あゝ何と申し上げたものか……」……私にはなんにも申し上げることができません」言葉に表現する事の出來ないもの、それが眞の心である。これは説明するよりも兒童自身の實感を思ひおこさせるとよく理解出來よう。本當の悲しみ、眞の怒り、憎しみ、くやしさを、そして、

「此の心にある事を口に出して言へな……」

眞心は言葉の技巧で表し得ないのである。そして又別の意味にはコーデリヤは、姉達の言行不一致を知り、父王の行末を豫期してゐたとも云へよう。

「勝手にしろ」權勢と物質によつて眩惑された心は、遂に眞實を知り得なかつた。

二場、一場より凡そ二週間を過ぎてゐる。ゴナリルの邸内、父は父の權威を振り廻し、娘は自己の生涯を主張して、遂に第一の破綻をまねく。リヤ王はゴナリルの道ならぬ言葉の數々に憤然として去る。

三場、リガンの家の門前である。こゝで一番娘にも増して不孝な娘の心を知つたのである、「私のところでは五十人の半分の二十五人に」

「まだお迎へ申す準備がしてございませぬ。」

リヤ王は生れたまゝの自分の意志——、といふより高山の頂に生ひ立つた樹の様に轟々とならしてゐた我意を娘たちによつて地上になげ出され蹂躪られたのであつた。

「これや、不孝者のうは手ぢや……今に世界中がひつくり返らないでゐるものか」

突如として起つた心中の大渦巻と激怒、滿身の激怒は一時に迸り出た。がその後に忽然として中核に現れたのは淋しい空虚であつた。

「年も積り、悲しみも積つて、見るかげもなくなつた此の老の果を」思つて癒しがたいさびしさ、残つたのであつた。そして、

「あらしだ。あらしよ、吹け」旺んに燃え狂ふ憤激と、やる瀬なき癒しがたい淋しい空虚との大渦巻——あらしである荒野に狂ふ、あらしである。

四場 フランス王の陣所の一遇である。發狂してかはり果てたリヤ王とコーデリヤとそして侍醫が居る。コーデリヤは神の如く、豊かな愛をたゞへた優しい、尙い姿である。このところではリヤ王の言葉と對照して、コーデリヤの一言一句を十分に味讀させなければならぬ。

「萬事おためによいやうに……」すべてに自己を忘れて父よかれと祈る、粉飾のない言葉である。

「おゝおとう様……」祈りと嗟嘆の言葉である。一夜のむごき運命は身にあふれ狂へる魂に世をのろふ痛ましい老王、そしてその身をいやが上にもさいなむ荒野のあらし。胸の痛みを夢に忘れてねむる老王の顔をしげくと見入つて、自分の愛の力と侍醫の力とあらゆる藥物の力でいやして上げようと祈るのである。

「……………わしはばかな、たはけた老人でござる」  
自嘲の悲惨な言葉である。

「笑つて下さるな、どうもわしの末娘……………」

忘れられぬのは愛娘コーデリヤ、幻影か、錯覚か、現實か……………

「其のコーデリヤでございます……………」父の覺めぬ魂にも自分を見解けた喜びにせき込んで、呼ぶのである。

「なんでうらむわけがございませう」ひたすらな、只、眞實そのものの言葉である。

「えいいただきます」純愛と眞實のコーデリヤの聲に呼び覺まされようとした魂は、「本國」といふ侍醫の言葉にのろはれの國を思ひ出し、心は再び攪亂されてしまふのであつた。

後は侍醫の言葉の外に何も云はぬコーデリヤの神への敬虔な祈りがあるのである。

三 朗讀

本文

朗讀上の注意

ダイ ジューク、リヤオー、

○對話に於ては各人各様の心持が如實に表現されるやうに、十分言葉調子に注意しなければならぬ。

イチ、

リヤオーワ、サンニンノ ムスメ、ムスメノ ムコ、

ジューシンナドオ メンゼンニ ヨンデイーワタス、

リヤオー、ヨモ ダイブ コーレーニ ナツタニ ヨツテ、

イライ メンドーナ セージノ コトワ、ワカイ モノ

タチニ マカセ、ミガルニ ナツテ ローゴオ オクリ

タイト オモー、ソコデ、キョーワ ワガ オーコクオ

サンブンシテ、サンニンノ ムスメタチニ アタエル

コトト スル、(シンカニ)チズオ モテ、

サテ ムスメドモ、ソナタタチノ ナカデ、ダレガイ

チバン コノ ワシオ ダイジニ オモツテ クレルカ、

ソレオ ソナタタチノ クチカラ キキタイ、ソノ ウ

エデ、イチバン コーコーノ ココロ アル モノニ、

サイダイノ オンケーオ アタエルデ アロー、マズ

アネノ ゴナリルカラ モーセ、

ゴナリル、チチウエ、ワタクシワ クチデ モース コト

○「大分」はダイブンともいふ。

○「身輕になつて」を別々にいふ時、アクセントは ミガルニ ナツテとなる。



ノ デキマス。イジョーニ、チチウエオ ソンケーモ  
 イタシ、オイトシクモ オモイマス、コノ ヨノナカニ  
 アル ナニヨリモ、ドンナ トートイ タカラヨリモ、  
 イヤ、ワタクシ ジシンノ イノチヨリモ、チチウエオ  
 タイセツト ゾンジマス、コノヨニ ンマレタ ドン  
 ナ コーコーノ コニモ マシテ、マゴコロオ チチウ  
 エニ ササゲマス。  
 リヤオー、ン、(チズオ サシテ、)デワ、コノ センカ  
 ラ コノ センマデオ ソナタニ アタエル、シゲツタ  
 シンリン、ユタカナ ヘーヤ、ウオニ トム カワ、  
 ヒロイ ボクジョーノ アル コノ キョーイキノ リ  
 ヨーシユト、ソナタオ スルノダ、サテ、ニバンムスメ  
 ノ リガンワ、  
 リガン、ワタクシノ ココロモチワ、アネウエト マツタ

ク オナジデ ゴザイマス、アネウエワ、ワタクシノ  
 オモツテ イル トーリオ オツシャイマシタ、タダ  
 ホンノ スコシ オツシャリタラス トコロガ チガイ  
 マスダケデ、ワタクシワ アラユル コーフク、イッサ  
 イノ タノシミオ ギセーニ シマシテモ、チチウエ  
 オヒトリニ オツカエ モースノオ シアワセト ゾン  
 ジマス。  
 リヤオー、デワ、コレガ ソナタノ リョーチジャヒロサ  
 ニ オイテモ、ネウチニ オイテモ、ケツシテ アネノ  
 ニ オトリワ セズゾ、サー、イトシー スエノ コー  
 デリヤワ ナントダ、  
 コーデリヤ、アー、ナント モーシアゲタモノカ、クチサ  
 キダケデ ジッコノ トモナワナイ コトワ、ワタク  
 シニワ モーシアゲラレナイ、チチウエ、ワタクシニワ

讀本指導と朗讀法

ナンニモ モーシアゲル コトガ ゴザイマセヌ。  
 リヤオー、ナンニモ。  
 コーデリヤ、ハイ。  
 リヤオー、ナンニモ ナイ トコロカラワ。ナンニモ  
 マレヌゾ、アラタメテ モーセ。  
 コーデリヤ、ワタクシワ、コノ ココロニ アルコトオ。  
 クチニ ダシテ イエナイノデ ゴザイマス。ワタクシ  
 ワ、アナタオ チチウエトシテ タイセツニ イタス  
 ツモリデ ゴザイマス。  
 リヤオー、コーデリヤ、イーカタオ ツクロワヌト ミノ  
 タメニ ナラヌゾ。  
 コーデリヤ、チチウエノ オイーツケオ マモリマス。  
 コトシテノ ツトメモ イタシマス。  
 リヤオー、アイキョーノ ナイ コトバジャ。 タッタ

○「なんにも」は驚いて反問する意味の言葉であるから終を上り調子にいふ。  
 ○このリヤ王の言葉は終りの方少し怒氣を含んでゐるのであるから強くいふがよい。

ソレダケカ。  
 コーデリヤ。  
 リヤオー、ソレワ ホンシンデ ユーノカ。  
 コーデリヤ、ハイ、シンジツデ ゴザイマス。シンジツヨ  
 リ ホカニ、ワタクシワ ナニモ ゴザイマセヌ。  
 リヤオー、カッテニシロ、ソノ シンジツ ダケオ ジサ  
 ンキンニシテ、ドコエデモ ヨメイルガ ヨイ、ノコリ  
 ノサンブンノ イチワ、アラタメテ チョージョト ジ  
 ジョトニ ワケアタエル。  
 ジューシン、ア、モーシ、ソレワ アンマリデワ ゴザイ  
 マセヌカ。  
 リヤオー、ユミワ ヒキシボッテ アル、ヤサキオ サケ  
 ロ。  
 ジューシン、ワタクシワ ツツシンデ モーシアゲマス。

○ドコエデモといふ。

○この「あ」は急いで制止しようとする心持で。

讀本指導と朗讀法

スエヒメサマワ、ケツシテ、ゴフコーナ、オカタデワ  
ゴザイマセヌ、モシ、ワタクシノ、コノ、ハンダンガ  
アヤマツテ、オリマスナラ、ドーゾ、ワタクシノ、クビ  
オ、オメシ、クダサイマセ。

リヤオー、イヤ、クドイ、クドイ、モー、ユーナ、サテ、  
コー、リョーチオ、ニブンシテ、フタリノ、ムスメニ  
アタエルカラニワ、ヨワ、コンゴ、ヒヤクニンダケノ  
ケライオ、ツレ、ツキガワリニ、アネムスメ、イモート  
ムスメノ、モトエ、マイツテ、ヨセーオ、オクル、コト  
ニスル。(フランスオーニ)ダイオー、スエムスメト  
ノ、カネテノ、コンヤク、アナタワ、ソレオ、オハタシ  
ニ、ナル、オツモリカ、ゴランノ、トリー、イツサイ  
ジサンキン、ナシノ、コジキ、ドーゼン、イカヨーニ  
ナサレヨート、アナタシダイデ、ゴザルガ。

○「お召し下さいませ」を別々にいふ時アクセントはオメシ、クダサイマセとなる。

○「御覽の通り」を別々にいふ時アクセントはゴランノ、トリーとなる。

フランスオー、ワタクシワ、ジサンキント、コンヤクワ  
イタシマセヌ、コーデリヤドノ、トートイ、シンジツ  
オ、タカラニ、ドコマデモ、キサキト、イタシマス。  
リヤオー、ヨイ、ヨーニ、ナサレ、ムスメワ、カンドーデ  
ゴザルゾ。

ニ。

フランスオー、ショーチ、イタシマシタ。  
リヤオー、ケライタチト、カリカラ、カエル、ゴナリ  
ルノ、メシツカイニ。  
リヤオー、スコシモ、マテヌ、サツソク、シヨクジノ、シ  
タクオ、シロト、イエ、イヤ、モー、スツカリ、ツカレ  
タ、シヨクジダ、シヨクジダ。  
ゴナリル、ムズカシソーナ、カオオシテ、デテクル。

○ドコマデモともいふ。

○「よいやうに」を続けていふ時ヨーニのアクセントはあまり高くない。

○「勘當でござるぞ」を別々にいふ時アクセントはカンドーデ、ゴザルゾとなる。

○「家來」は單獨にはケライである。「家來たち」はケライタチともいふ。

〔参考〕  
カリ (狩・雁)  
カリ (借・假)

○「出て来る」と続けていふ時クルのアクセントはあまり高くない。

讀本指導と朗讀法

ドーシタノダ ムスメ、ナゼ ヒタイニ ハチノジオ  
ツクツテ イル、チカゴロワ、ムズカシー カオバカリ  
ミセルノ。

ゴナリル、ドーモ プサホー センパンナ オツキノケ  
ライタチガ、シヨツチュー ノノシリアツテ、ワタクシ  
ノ タクワ マルデ ハタゴヤ ドーゼンデ ゴザイマ  
ス、ソレモ、キツト チチウエニ トリシマツテ イタ  
ダコート ゾンジマスノニ、ドーヤラ チチウエガシ  
リオシオ ナスツテ イラツシャル ヨーニ オモワレ  
テ ナリマセヌ、モシ ソート イタシマスト、イエノ  
タメ クニノ タメ、ワタクシガ トリシマリオス  
ル コトニ ナリマシテ、シゼン チチウエノ ゴキゲン  
オ ソコネル ヨーナ コトニナルカト ゾンジマス、  
リヤオー、ソレデ オマエサンワ ワシノ ムスメカ、

ゴナリル、モシ、ソナナ ヒニクワ ゴメンオ コームリ  
マス、チチウエワ ゴコーレーデ イラツシャルカラ、  
ゴケンメーデ ナクテワ ナリマセヌ、チチウエ、サツ  
キモ モーシマシタ トーリ、マイアサ マイバン オ  
ツキノ ヒヤクニンノ オーサワギ、コレニワ ワタク  
シモ ホトホト ヘーコー イタシマス、キョーカギリ  
ゴジューニンニ ヘラスコトニ ゴドーイオ ネガイ  
マス、

リヤオー、オノレ、ヨクモ モーシタナ、ヨノ ンマニ  
クラオ オケ、ケライドモ アツマレ、ミチシラズノ  
オンシラズメ、モー ヤツカイニ ナラヌワイ、ワシニ  
ワ、マダ モー ヒトリノ ムスメガアル、アー ア  
ー、コーカイ サキニ タタズ、カイイヌニ テオ カ  
マレタ ホーガ マダ マシジャ、

○「二度目の」あゝは低く最初のあゝの残りの  
息で軽く溜息の如くにいふがよい。  
「あゝ、あゝ」以後は嘆息していふ氣持で。

ゴナリル。ドーナリトモ。オスキナヨーニナサイマセ。

サン。

リガンノ イエノ モンゼンデ メシツカイニ。

リヤオー。ナニ ゴビョーキデ オメニ カカレスト。ビ

ョーキナラ。チチガ ビョーシヨエ オミマイ モー

スト イエ。

リガン デテ クル。

オー キタ。ソー アルベキジャ。ムスメヨ。アネメワ

ヒドイ オンナジャゾ。フコーモノノ ツメデ。ワシ

ノ ココロオ カキムシリオッタ。

リガン。チチウエ。アナタニワ アネウエノ マゴコロガ

ヨク オワカリニ ナラナイノダト ゾンジマス。

リヤオー。ナント。

○このリヤ王の言葉は多少怒氣を含んだ詰問の心持でいふがよい。

○「なに」は反問の意味であるから終を稍上り調子に詰問の心持でいふがよい。

○「お目にかゝれぬと」の終も反問の意味であるから詰問の心持で稍上り調子に。

○「お見舞申す」を別々にいふ時、アクセントはオミマイ モースとなる。

○「さうあるべきぢや」を別々にいふ時アクセントはソー アルベキジャとなる。

○「ひどい女ぢやぞ」の終の「ぞ」は強く稍上り調子に。

○「なんと」の終も反問の意味であるから上り調子に。

リガン。ワタクシニワ。アネウエガ スコシデモ オツト

メオ オオコタリニ ナロートワ オモワレマセヌ。ア

ナタノ オツキノ モノノ ランポーニ タイシテ。ア

ルイワ オコゴトガ デタカモ シレマセヌガ。

リヤオー。ワシノ ケライオ ゴジューニンニ ヘラシオ

ッタ。

リガン。ゴジューニンデ ケツコージャ ゴザイマセヌカ。

オトナシク。アネウエノ トコロエ オカエリ アンバ

セ。

リヤオー。イヤ カエラヌ。ケツシテ カエラヌ。キョー

カラ ソナタノ トコロデ セワニ ナロー。

リガン。ワタクシノ トコロデワ ゴジューニンノ ハン

ブンノ ニジュー ゴニンニシテ イタダキトー ゴザイ

マス。ソレニ。アネウエノ トコロエ イラッシャツテ

○アルイワともいふ。

○「小言」のアクセントはコゴトである。

○「世話にならう」と続けていふ時、ナローのアクセントはあまり高くない。

讀本指導と朗讀法

カラ ヤット ニシユーカン。ワタクシノ ホーニワ。  
マダ オムカエ モース ジュンビガ シテ ゴザイマ  
セス。

リヤオー、コレヤ フコーモノノ ウワテジャ、オーカ  
ミガミモ ゴシヨラン アレ、トシモ ツモリ、カナ  
シミモ ツモツテ、ミルカゲモ ナクナツタ コノ オ  
イノ ハテオ、オノレ フコーモノメ、イマニ セカイ  
ジユーガ ヒツクリカエラナイデ イルモノカ。

ソトワ、シダイニ ポーフー ライウ。

デテ イコー、アラシダ、アラシヨ、フケ、アメヨ、タ  
キツセト フレ、イカズチヨ、テンチオ ツンザケ。

シ。

リヤオーガ アネタチニ ギヤクタイ サレテ イル

「出て行かう」以下は半狂亂に叫ぶやうな氣  
持でいふがよい。

コトオ タンチシタ コーデリヤワ、フランスオー  
ニ シタガイ、ローフオーノ タメニ グンゼーオ  
ヒキーテ エーコクニ ワタツタ。

ヒドイ アラシノ ヨクチョー、ハッキョーシタ ロ  
ージンガ、コーヤニ サマヨツテ イルノオ フラン  
スヘーガ ハッケンシテ ジンシヨニ トモナイ、ジ  
イガ テオ ツクシテ カイホー スル、ソレガ リ  
ヤオーデ アツタ。

ジイ、イカガ イタシマシヨ、オオコシ モーシマシヨ  
ーカ、モー ダイブン ナガク オヤスミニ ナツテ  
オリマス。

コーデリヤ、パンジ オタメニ ヨイ ヨーニ トリハカ  
ラツテ オクレ。

オーニ チカヨツテ、ネガオオ ナガメ。

第十九リ ヤ 王

○「お起し申しませうか」を別々にいふ時、ア  
クセントはオオコシ モーシマシヨーカと  
なる。

○「大分」はダイブともいふ。

○「なつてをります」と続けていふ時オリマス  
のアクセントはあまり高くない。

○「よいやうに」と続けていふ時、ヨーニのア  
クセントはあまり高くない。

オー オトーサマ。ワタクシノ チカラ。ジイノ チカ  
 ラ アリト アラユル ヤクブツノ チカラデ アネウ  
 エタチカラ オウケニ ナツタ オココロノ イタミガ  
 スツカリ トレマス ヨーニ。タトエ アナタガ オト  
 ーサマデ ナイニモセヨ。コノ シロイ カミヤ オヒ  
 ゲオ ミテワ。オキノドクダト オモワネバ ナラナイ  
 ハズダノニ。マア コノ オカオオ アレクルー アノ  
 アラシニ オサラシニ ナツタトワ。アノ ハタメク  
 イカズチニ。スサマジー アメニ。  
 リヤオー メオ ヒラク。

リヤオー。ハカバカラ。ワシオ ツレダストワ アンマリ  
 ジャ。ハテ。アナタワ テンニンジャナ。  
 コーデリヤ。ワタクシオ ゴゾンジ ゴザイマセヌカ。  
 リヤオー。コーツト。ワシワ イママデ ドコニ イタノ

○「お」以下のコーデリヤの言葉は父上をあはれみいたむ切ない心持の表はれるやうにいふがよい。

〔参考〕

カミ (髪・紙・神)  
カミ (神・上・加味)

○以下リヤ王の言葉に静かにゆつくりといふがよい。

○「天人ぢやな」の終は上り調子に。

カナ。ココワ ドコジャ。ヤ ヒガ サス。テオ ツネ  
 ルト イタイ。

コーデリヤ。ワタクシオ。ヨーク ゴラン クダサイマセ。  
 リヤオー。ドーカ ナブツテ クダサルナ。ワシワ。バカ  
 ナ。タワケタ ロージンデ ゴザル。ハテ。オマエサン  
 ワ。ドーヤラ ミオボエノ アル カタノ ヨーダガ。  
 ハツキリ セヌ。ワラツテ クダサルナ。ドーモ ワシ  
 ノ スエムスメ コーデリヤノ ヨーニ オモエテ ナ  
 ラヌ。

コーデリヤ。ソノ コーデリヤデ ゴザイマス。コーデリ  
 ヤデ ゴザイマス。  
 リヤオー。ナミダオ ナガシテ ナイテ クダサルノカ。  
 オー ナミダジャ オマエサンワ ワシオ ウラシ  
 イル ハズダガ。

○「御覽下さいませ」を別々にいふ時、アクセントはゴラン クダサイマセとなる。

○「見えのある方のやうだが」を續けていふ時、第二語以下のアクセントはあまり高くない。

コーデリヤ、ナンデ ウラム ワケガ ゴザイマショー、  
 ナンデ ウラム ワケガ ゴザイマショー、  
 リヤオー、ワシワ フランスエ キテ イルノカ、  
 ジイ、イヤ ゴホンゴクニ イラセラレマス、  
 リヤオー、エイ ダマスナ、  
 コーデリヤ、マダ オココロノ ミダレガ オナオリニ  
 ナツテ イナイ、  
 ト タンソクスル、  
 ジイ、ソノ テンワ オココロズヨク オボシメシ アソ  
 バシマセ、ハゲシー ゴランシンワ、モー オサマリマ  
 シタ、オキサキサマニワ、オクエ イラツシャツテ、シ  
 バラク オアイニ ナラヌ ホーガ ヨロシユー ゴザ  
 イマス、ココ ニサンニチデ、キツト ゴホンブクニ  
 ナリマスカラ、

#### 指導概要

##### (一) 教材

- (1) 文は十七頁に亙る長篇で、而も表現形式は総合的な複雑性を持つてゐるが、さうした事は素直に讀み浸らせる事によつてさして困難ではない。
- (2) かゝる教材の指導は、通讀によつてよく其の場面情景を直観想像させる事が大切である。
- (3) この文はいかに長くとも最初から全文取扱ひをなすべきである。一場の三人の娘たちの各父王に答へた言葉と二場三場の二人の娘の非道なる主張、リヤ王の悲劇的心情の變化と三場の末娘の豊かな愛情と、そこに全體的な総合的な、變化があり、全文の劇的テーマがあるのであるから、全文的取扱によつて統一の美、即ち藝術的價值を見出させなければならない。
- (4) 齡、惠、域、値、劣、避、判斷、許、谷、額、損、皮、賢、閉、介、悔、照、雷、探、狂、抱、思と新出、讀替文字も少くはないが、全文殆ど通常語であるから理解に困難を感じる程ではない。
- (5) 語句には、持參金、婚約、勘當等の外は左程むづかしいものはないが、戯曲は、語り合ひ受け續く言葉によつてのみ、テーマの進展も、發想も、情景も出てゐるのであるから、一人一人の言葉を十分に讀み味はせなければならぬ。そして戯曲は一人一人の性格が、個性が、言葉で表現され強調されてゐる事も述べたいものである。

(5) 文が四場から構成されてゐる事は指導觀でも述べたが、各場の場所、情景、人物等をよく理解させなければならぬ。尙、劇或は小説なるものは、必ず人生に對する何等かの示唆暗示を持つてゐる事、この文では、與へ



るが故に求め得るといふ考への破綻、權勢によつて如何ともなしがたい人生の苦惱が伏在してゐるといふ様な事も或る程度まで讀み取らせたい。

(6) この様にして兒童を劇中人物の中に溶け入らせて、その人物の心を十分に再構成的に體驗して讀む事によつて實演への意志も觸發され、演出の作業發展が欲求されるであらう。

(二) 挿畫

百三十八頁、リヤ王が三人の娘たちに土地を與へんと一人一人にその孝行の程度を聞いてゐる繪である。百五十頁、發狂した父王とコーディリヤとの會見の場である。この劇のクライマックスであり又コーダである。

第二十 裁 判

一 要 旨

裁判の種類、階級、裁判所の構成及び裁判の目的並びに一般國民の裁判に對する心得等を説明された本文を讀解させて、裁判は正義を保護し、社會の秩序を維持して、此の世を平和な秩序正しいものとする大切な仕事であることを知らせ、兼ねて遵法の精神を養ふ。

二 指導観

(一) 本課は裁判の種類、意義及び組織、その目的並びに一般國民の裁判に對する心得等をかいた説明文である。そ

の説明も順序正しく整然と、理智的にかゝれ、しかも、いろ／＼の具體例を多く取入れてわかり易くかゝれてゐるので、往々にして無味乾燥に流れ易いこの種の教材も兒童には興味深く讀まれるであらう。

(二) 裁判は、正義を保護し、秩序を維持するための大切な仕事で、此の世を平和な秩序正しいものにするのは一に裁判あるがためである。即ち、裁判は、國法の規定を、實際の問題にあてはめて適當公平な判決を下して國法の趣旨を實現するものである。従つて本課は國民生活上、實に重要な一課であるといふべきで、その指導に當つては、智的にも情的にも深き徹底を期さねばならない。

(三) 文の構成は六段に分れる。即ち、第一段に於ては民事裁判について、第二段に於ては刑事裁判を、第三段に於ては裁判の意義を、第四段に於ては裁判所の組織、第五段に於ては裁判の心得、第六段に於ては裁判の目的をかいてある。

三 朗 讀

本文

朗讀上の注意

ダイ ニジュー、サイバン、

カシタ カネオ カエセト イツテ、コーガ サイソク

第二十 裁

判

スル、ソレニ タイシテ、カリタ オボエワ ナイ トカ、  
 モー カエシタ ハズダ トカ、オツガ シュチヨース  
 ル、コーユー ホーリツ ジョーノ アラソイガ アツタ  
 バアイニ、サイバンシヨワ、コー スナワチ ゲンコク  
 ノ ウツタエオ ウケツケ、オツ スナワチ ヒコクオモ  
 ヨビダシテ、リョーホーノ イーブンオ キータリ、シヨ  
 ーニンヤ ショーコノ カキツケオ シラベタリ、シタ  
 ウエデ、ドチラノ シュチヨーガ タダシーカオ ハンダ  
 ンシ、カネオ カエセ トカ、ヘンキンオ セーキュース  
 ル ワケニワ イカナイ トカ イーワタス、コノ ヨー  
 ニ、ヒトビト ソーゴノ ソシヨーオ サバク ノガ ミ  
 ンジ サイバンデ アル。

マタ タトエバ コーノ モツテ イル イエガ ヤケ  
 タ ト スル、ソーシテ ソレガ ドーモ ホーカ ラシ

○「それに対して」を別々にいふ時、アクセントは ソレニタイシテとなる。

二四四

○「呼出して」を別々にいふ時、アクセントは ヨビダシテとなる。

○「此のやうに」を別々にいふ時、アクセントは コノ ヨーニとなる。

○「民事裁判」を別々にいふ時、アクセントは ミンジ サイバンとなる。

○「放火」と單獨にいふ時、アクセントは ホーカである。

ク オモワレ、オツガ ソノ ハンニン デワ ナカロー  
 カ トユー ウタガイノ アル バアイニ、コーエキオ  
 ダイヒヨースル ヤクニントル ケンジガ サイバンシ  
 ヨニ ウツタエオ オコシ、サイバンシヨワ、ケンジノ  
 シュチヨート ヒコクニントル オツノ ベンカイトオ  
 キキ、シヨーニン ソノ タノ ショーコオ トリシラベ  
 タ ウエデ、アルイワ ユーザイノ ハンケツオ クダシ  
 テ ケーオ イーワタシ、アルイワ ムザイノ ハンケツ  
 オ スル、コーユーノガ ケージ サイバンデ アル。

サイバンワ、ヨースルニ コクホーノ キテーオ ジツ  
 サイ モンダイニ アテ ハメル コトデ アル、タトエ  
 バ ミンボーニ、コイ マタワ カシツニ ヨリテ タニ  
 ンノ ケンリオ シンガイシタル モノワ、コレニ ヨ  
 リ ショージタル ソンガイオ バイシヨースル セメニ

○「役人」と單獨にいふ時、アクセントは チャクニンとなる。

○「刑事裁判」を別々にいふ時、アクセントは ケージ サイバンとなる。

○「實際問題」を別々にいふ時、アクセントは ジツサイ モンダイとなる。

二四五

ニ<sup>ンズ</sup>、ト キ<sup>テ</sup>ーシ<sup>テ</sup> アルガ、ジ<sup>ツ</sup>サイノ ジ<sup>ケ</sup>  
 ンニ ア<sup>タ</sup>ツ<sup>テ</sup>ワ、ホ<sup>ン</sup>トーニ ソーシ<sup>タ</sup> フ<sup>ホ</sup>ー コー  
 イガ ア<sup>ツ</sup>タカ ドーカ、モシ ア<sup>ツ</sup>タト スレバ ドノ  
 クライノ ソ<sup>ン</sup>ガイ バイシ<sup>ョ</sup>ーオ サセ<sup>ル</sup>ノガ テ<sup>キ</sup>  
 トーデ アルカオ ハ<sup>ン</sup>ダン セ<sup>ネ</sup>バ ナラヌ、マ<sup>タ</sup> タ  
 トエバ ケーホーニ ヒ<sup>ト</sup>オ コロシ<sup>タル</sup> モノワ、シ<sup>ケ</sup>  
 ー マ<sup>タ</sup>ワ ム<sup>キ</sup> モシ<sup>ク</sup>ワ サ<sup>ン</sup>ネン イ<sup>ジ</sup>ョーノ チ  
 ヨーエ<sup>キ</sup>ニ シ<sup>ョ</sup>ス、ト ユー キ<sup>テ</sup>ーガ アルガ、イ<sup>マ</sup>  
 モ<sup>ン</sup>ダイニ ナ<sup>ツ</sup>テ イ<sup>ル</sup> ヒ<sup>ト</sup>ガ、ホ<sup>ン</sup>トーニ サ<sup>ツ</sup>  
 ジ<sup>ン</sup> ジ<sup>ケ</sup>ンノ ハ<sup>ン</sup>ニ<sup>ン</sup>デ アルカ ドーカ、ホ<sup>ン</sup>トー  
 ニ ハ<sup>ン</sup>ニ<sup>ン</sup>デ アルト シ<sup>タ</sup>ラ、ドノ デー<sup>ド</sup>ノ ケー  
 オ ア<sup>テ</sup>ルノガ テ<sup>キ</sup>トーデ アルカオ ケ<sup>ツ</sup>テー セ<sup>ネ</sup>  
 バ ナラヌ、ソノ ハ<sup>ン</sup>ダン ケ<sup>ツ</sup>テーガ サイ<sup>バ</sup>ン<sup>デ</sup>  
 ア<sup>ツ</sup>テ、コ<sup>ク</sup>ホーノ シ<sup>ュ</sup>シ<sup>ワ</sup>、コ<sup>レ</sup>ニ ヨ<sup>ッ</sup>テ ジ<sup>ツ</sup>ゲ

○「不法」を單獨にいふ時、アクセントはフ  
ホーである。

○「三年以上」を別々にいふ時、アクセントは  
サンネン イジョーとなる。

○「殺人事件」を別々にいふ時、アクセントは  
サツジン ジケンとなる。

ン サ<sup>レ</sup>ルノデ アル。

サイ<sup>バ</sup>ン<sup>ワ</sup>、サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>ョデ ハ<sup>ン</sup>ジガ オ<sup>コ</sup>ナウ、サ  
 イ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>ョニワ、ク サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>ョ、チ<sup>ホ</sup>ー サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>  
 ヨ、コー<sup>ソ</sup>イン、ダイ<sup>シ</sup>ン<sup>イン</sup>ノ シ カイ<sup>キ</sup>ユーガ ア  
 ツ<sup>テ</sup>、ク サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>ョワ ヒ<sup>ト</sup>リノ ハ<sup>ン</sup>ジ、チ<sup>ホ</sup>ー  
 サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>ョ、コー<sup>ソ</sup>インワ ソ<sup>レ</sup>ゾレ サ<sup>ン</sup>ニ<sup>ン</sup>ノ ハ  
 ン<sup>ジ</sup>、ダイ<sup>シ</sup>ン<sup>イン</sup>ワ ゴ<sup>ニ</sup>ンノ ハ<sup>ン</sup>ジ<sup>デ</sup> ソ<sup>シ</sup>キ サ  
 レ<sup>ル</sup>、サイ<sup>バ</sup>ン<sup>ワ</sup>、ジ<sup>ケ</sup>ンノ ケー<sup>ジ</sup>ユーニ ヨ<sup>ッ</sup>テ、サ  
 イ<sup>シ</sup>ョ ク サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>ョ マ<sup>タ</sup>ワ チ<sup>ホ</sup>ー サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>  
 ヨデ オ<sup>コ</sup>ナワ<sup>レ</sup>ルガ、コノ ダイ イ<sup>ッ</sup>シ<sup>ン</sup>ノ サイ<sup>バ</sup>  
 ンニ フ<sup>フ</sup>ク<sup>ナ</sup> モノワ チ<sup>ホ</sup>ー サイ<sup>バ</sup>ン<sup>シ</sup>ョ マ<sup>タ</sup>ワ  
 コー<sup>ソ</sup>インニ コー<sup>ソ</sup>シ、ソノ サイ<sup>バ</sup>ン<sup>ニ</sup> ナ<sup>オ</sup>フ  
 フ<sup>ク</sup>ナ モノワ モー イ<sup>チ</sup>ド ダイ<sup>シ</sup>ン<sup>イン</sup>ニ ジョー  
 コ<sup>ク</sup>スル コ<sup>ト</sup>ガ デ<sup>キ</sup>ル、コー ユー フーニ ニ<sup>カ</sup>イ

○「されるのである」を續けていふ時、アルの  
アクセントはあまり高くない。

マデ ジョーソシ ウル ヨーニ ナツテ イルノワ、ツ  
 マリ サイバンオ ネンイリニ スル タメデ アル。ソ  
 ーシテ ケージ サイバンショデワ ケンジガ タチアイ。  
 マタ ジンミン チューカラ センター サレタ ジュー  
 ニ ニンノ バイシンインガ ジジツノ ハンダンニ ア  
 ズカル バアイガ アル。マタ ベンゴシト ユーモノ  
 ガ アツテ、ミンジ サイバン デワ、ゲンコク ヒコク  
 ノ ツキシソイニン マタワ ダイリニン トシテ ソノ  
 シュチョーオ タスケ、ケージ サイバンデワ、ヒコクニ  
 ノ タメニ ベンロン スル。  
 サイバンニ ツイテ ダレデモ ココロエテ オクベキ  
 コトワ、ミンジ サイバンデワ、サイバンデ キメラレタ  
 コトニ フクジュー スル コトデ アリ、ケージ サ  
 イバンデワ、ユーザイノ ハンケツガ カクテースル マ

エニ、ミダリニ ヒトオ ハンザイシヤ アツカイニ セ  
 ヌ コトデ アル。マタ バイシンインニ ナツタ バア  
 イニワ、ソレオ コクミンノ ギム トシテ チュージツ  
 ニ ツトメル コト、ショーニン トシテ ホーテーニ  
 デタ バアイニワ、リョーシンニ シタガツテ シンジ  
 ツオ ノベル コト ナドワ ヒジョーニ タイセツナ  
 コトデ アル。

サイバンノ モクテキワ、ケツシテ ヒトオ アラソワ  
 セタリ、ヒトオ バツシタリ スル コトデワ ナイ。コ  
 ノ、オ フドリーヤ ザイアクノ オコナワレナイ ヘ  
 ーワナ チツジョ タダシー モノニ スル コトガ ソ  
 ノ モクテキデ アル。モシ サイバンガ ナカッタト  
 シタラ、ヒトビト ソーゴノ アラソイガ ハテシナク  
 オコナワレテ、チカラノ ツヨイモノガ カチ、ワル

○「場合」と單獨にいふ時、アクセントは  
 アイとなる。

ガシコイ モノガ マスカレル コトニ ナルデ アロ  
 ー。モシ マタ、サイバンガ コーヘーニ オコナワレヌ  
 トシタラ、セツカクノ コクホーモ カチオ ウシナ  
 イ、ワレワレワ アンシンシテ セーカツ スル コトガ  
 デキナイデ アロー。サイバンワ ジツニ、セーギオ  
 ホゴシ、チツジョオ イジ スル タメノ ダイジナ シ  
 ゴトダト イワネバ ナラヌ。

○「出来ないであらう」を続けていふ時、アロ  
 ーのアクセントはあまり高くならない。

四 指導概要

(一) 教材

- (1) 先づ通讀させ、新出文字、讀替文字等の指導をしてから、裁判の四階級及び裁判の二つの種類について考察させ、之を表解させる。
- (2) 次には此の表解に基づいて更に深く究明させる。即ち民事裁判及び刑事裁判については、どんな裁判か、文のどこからどこまで説明してあるか、原告、被告を多くの實例について語らせる。讀方帳へそれ等の要點をかゝせる。
- (3) 第六段の裁判の目的については更に深き考察を要する。即ち、裁判はどんな目的で行はれるか、若し裁判がな

かつたら此の世の中はどうなるか、かりに、裁判が不公平に行はれたとしたらどうなるか等について文自體について十分な研究をさせねばならない。

- (4) 本課は内容もむづかしく、法律的専門の言葉も多く、しかもその一つ一つに深い意味が含まれて居り、尙それ等の一つ一つは國民の常識として知つておかねばならぬことが多いから、十分に説明を加へて理解徹底をさすべきである。

(二) 挿畫

百五十六頁の寫眞は東京地方裁判所の法廷の光景である。これは民事裁判だから原告、被告は出てゐない。辯護士が兩方を代表してやつてゐるのである。正面中央は判事で裁判長その右隣は陪席判事、右端は書記、左端は檢事、前面の四人は辯護士、今、その一人が立つて辯論してゐるところである。他は傍聽人である。

(三) 準備

機會を見て裁判所を見學させ、法廷を見させるがよい。

三 参考

1 裁判所の種別……四階級

● 區裁判所……判事一人

一府縣に數箇所、民事、刑事事件のあまり重くないものを取扱ふ。

● 地方裁判所……判事三人

各府縣に一箇所宛、區裁判所の上位。區裁判所より重い事件、又は區裁判所判決の第二審を取扱ふ。

●控訴院……判事五人

東京、大阪、名古屋、廣島、熊本、仙臺、函館の七箇所。

其の取扱ふ事件は、下位裁判所の判決に對する上告や、皇室に關する事件。

●大審院……東京にたゞ一つ。

最高の裁判所で、民事部、刑事部をおく。地方裁判所及び控訴院の第二審の判決に對する上告事件を取扱ふ。

## 第二十一 雪 残 る 頂

### 一 要 旨

明治俳壇の巨匠としての、子規・鳴雪の句を味ははせ、短歌と共に我が國民文學としての俳句の妙味を鑑賞させると共に、その豊かな詩趣を開拓し詩心を養ふ。

### 二 指導観

(一) 俳句は讀本に於て、これまで卷九第十一「雀の子」に一茶の句が五句、卷十第七「朝顔」に千代の句が五句、更に卷十一第二十「蟲の聲」に芭蕉を始め、鬼貫、蕪村の句が七句載せられてゐる。

本課「雪残る頂」に於ける子規・鳴雪の句は、明治俳壇の代表としての二人の作を選んだもので、卷十一「蟲の聲」に於ける徳川時代と相聯繫して史的展開を見ることが出来るであらう。

(二) 本課に於ける俳句の特色は、その著しい現實的な感情にある。芭蕉の觀念的な幽寂の境地から、著しく現實化され、具象化せられてゐる。そしてこれは子規以後明治俳壇に於ける一つの大きな動きである寫生の効果によるもので、その點むしろ繪畫的であるといつてもいい。本課によつてさうした境地を捉へさせることが大切である。

(三) 「雪残る」の句は、早春の景を詠んだもので、遠く國境の山一つを残して、そこには春が訪れて來た心持が中心となつてゐる。即ち、遙かに遠い山々を見渡すと、どこもかしこも春が訪れて、唯一つ國境の山の頂に冬の名残の雪を残してゐるといふのである。

(四) 「菜の花や」の句は、平和な、そしてのどかな野の春の盛りの氣持を詠んだもので、見渡す限り菜の花が黄色に咲きにほつてゐる。今は春の眞盛りであり、ちやうど小學校も晝時と見えて、のどかな田園の中に子供たちのよろこびさわぐ聲がにぎやかに聞えて來るといふのである。

(五) 「柿くへば」の句は、法隆寺の秋のさびた心持を詠んだもので、秋深い頃、法隆寺の茶屋に休んで、柿をくつてゐると、丁度鐘の音がひびいてくる。いかにも昔をしのぶやうなさびた心持がするといふのである。

(六) 「犬が來て」の句は、もうすつかり冬になつてしまつて、家の中にあると、ひし／＼と寒さが襲つて來る。そこへ犬が來て外で水を飲む音がするといふので、冬の夜寒をしみ／＼と感ずる心持を詠んだものである。

(七) 「夕月や」の句は、早春の、ほのかに春を感ずる心持を詠んだもので、夕月がさえわたつてゐる春の宵、納屋もうまやも庭の梅の木影がさしてゐるといふのである。まことに繪のやうな情景である。

(八) 「矢車に」の句は、初夏のすが／＼しい感じ、矢車に風が鳴り、鯉のぼりが高くはね上るその勇ましさ詠んだものである。五月の鯉のぼりが立つてゐる。そこへ朝風が強く吹いて來て、鯉が元氣よくはね上り、矢車ががら／＼

と音を立てゝゐるといふのである。

(九)「夏山の」の句は、山中の静かな中に、大木を倒すこだまの、動的なその心持を詠んだもので、夏の山に木こりが大木を切りたふしてゐる。地ひゞきを立てゝ倒れていくその大きな音が、こだましてひゞき渡つて來るといふのである。

(一〇) 俳句はこれによつて一先づ完結してゐるのであるから、これまでの俳句を總括的に比較考察させること及び俳句の持つ詩形、その表現上の特性、興趣等について味ははせることが大切である。而して自ら創作させるに至らざれば更によ。

朗讀

本文

朗讀上の注意

ダイ ニジュー イチ、ユキノコル イタダキ。

○各句の心持をよく味ひながら、やゝゆつくり讀むがよい。

シキ

ユキノコル、イタダキ ヒトツ クニザカイ。  
ナノハナヤ、シヨীগアツコーノ ヒルゲドキ。

○「雪残る」の次は一寸息をつぐ程度にして次の「頂一つ」につゞけて讀むがよい。

カキ クエバ、カネガ ナルナリ ホーリニュージ。  
イヌガ キテ、ミズノム オトノ ヨサムカナ。  
ユーズキヤ、ナヤモ シマヤモ シメノ カゲ。  
ヤグルマニ、アサカゼ ツヨキ ノボリカナ。  
ナツヤマノ タイボク タオス コダマカナ。

○「うまや」梅を ウマヤ ウメ といはな  
いやらに注意を要する。

指導概要

(一) 教材

- (1) 先づ初に、これまでの「雀の子」に於ける一茶、「朝顔」に於ける千代、「蟲の聲」に於ける鬼貫・芭蕉・蕉村等の句を思ひ出させ、俳句の妙趣について考へさせる。
- (2) 次に「雪残る頂」に於ける子規・鳴雪の句を味ははせ、その詩境を考へさせる。
- (3) 次に一句一句、難語句を調べさせ、その情景を描かせ、十七字の短詩形に盛られた精神を捉へさせる。
- (4) あくまでも具體的に捉へさせることが大切である。そのためには一字一句深い省察を加へ、情景や心持を繪畫的に描かせて見ることが大切である。
- (5) 子規・鳴雪について適宜補説を行ふを要する。そして明治俳壇がどんなものであるか、それ以前の俳句とどう

なに趣を異にしてゐるかなどについて理解考察を與へることが大切である。

### 参考

#### 正岡子規

子規は伊豫松山藩久松侯の家中正岡隼太の長男として、松山市に呱呱の聲をあげた。五歳にして素讀を學び、十一歳繪を學び、其の時既に異色ある兒童として認められてゐた。十六歳初めて東京に遊學、初め漢學、次に哲學を志し、後東京帝國大學國文科に入つたが、病氣のため退學した。「俳句を研究せねば、足利以來の日本文學と其の思想は到底闡明することが出来ない。」とは彼が常に語つた言葉である。二十四歳より俳句の復興革新に志し、近々五年二十九歳の頃には、略其の大業を成就するに近くになつてゐた。次に三十歳頃から和歌の革新を思ひ立ち、「紀の貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ歌集に有之候」といふ當時としては反逆兒としか思へない程の痛烈な批判を加へ、三十四歳の頃には早くも歌壇一千年の永い惰眠を覺醒して寫生趣味による眞實味と自然味を和歌に注入して、殿上文學たる和歌を地下の書生學徒の手に移したのである。次で文章の革新をも思ひ立ち、寫生趣味を加へた言文一致の文を發表し、眞實を自然のまゝに敘寫するのでなければ、到底永遠の生命ある文章を得ることが出来ないことを述べ所謂寫生文の一派を興すに至つた。明治三十五年九月十九日年僅かに三十六で亡くなつた。

おとゝひの絲瓜の水も取らざりき

絲瓜咲いて啖のつまりし佛かな

啖一年絲瓜の水も間にあはず

これは死の一日前、即ち九月十八日に残された名殘の句である。

#### 内藤鳴雪

弘化四年四月十五日、江戸に生まれた。伊豫松山の藩士、内藤同人の長男である。幼い頃から學を好み、明治二十三年文部省参事官となつたが、後専ら常盤會寄宿舎生を監督し、又史料編纂に従つた。四十六歳俳諧を子規に學び、一年を出でずして一家の風格を示した。晩年は哲學宗教の研究にその力を傾け、大正十五年二月二十日年八十で歿した。

## 第二十二 太陽

### 一 要旨

太陽の偉大さを科學的のあらゆる觀點から考察した此の説明文を讀解させて、太陽に對する科學的知識を得させ、廣大無限なる大宇宙に存在する太陽が、あらゆる生命の源泉としての偉大さを理解させ、人類の生活が如何に太陽によつて限りなき恩恵を受けてゐるかを感得させる。

### 二 指導観

(一) 太陽の光を直接に多く受けるものは、其の地上のすべてのものが、生々發育を遂げ、大きな生活力を生み出して来る。即ち、植物は、太陽の光と熱とによつて生育し、動物は、その植物に依存して生きる。太陽がなければ植物は全然生育せず、従つて動物も生存し得ない。其上、太陽がなければ、此の世界は眞暗闇となると同時に、溫度は



忽ち零下二百四十何度といふ恐しい寒さとなつて、地上の一切のものは死滅する。空氣までも凍つて液體か固體になつてしまふ。

かく考へて見ると、太陽程、ありがたいものはない。人も動物も植物も、其他ありとあらゆる生物が、太陽の光と熱との恩恵によつて生々化育する。太陽こそあらゆる「生命の源泉である。」これ等の考へから我々は、太陽に對して崇拜に近い氣持をもつものであるが、あまりに、その恩恵が廣大無邊なために、其の實體がつかめない。本文は、かゝる感謝と信仰の心を母胎として、これに科學的の觀點から究明を試みたものであるから、十分に太陽に對する科學的知識の領得に努めなければならぬ。

(二) 太陽は地上では想像することも出来ないやうな、廣大無邊なものであるから、子供に對しては、先づ大きいといふこと以外には何も説くことが出来ない。その大きいといふことを、子供にわかり易く、具體的に、且つ直觀的に説くことに工夫してある。従つて兒童には興味深く讀まれるであらう。此の兒童の興味に立ち自發的研究心に訴へて十分に讀み味はすべきである。

(三) 本課の内容は、大體舊教科書のまゝであるが、其の表現は著しく工夫されてゐる。科學的に見た點は、前の卷十一の二十四、「月の世界」と同じであるが月の世界は死の世界であり本課は動の世界であり、生の世界である。よく「月の世界」と對照して十分その機能を得させるがよい。

(四) 文の構成を見ると大體五つに分れる。

卷頭に於ては、すべての生物にとつて、太陽ほどありがたいものはないと感謝の信仰を述べてゐる。本文の「すべての生物にとつて、太陽ほどありがたいものがあるだらうか。」は、疑問ではなくして大なる肯定を述べ、限りなき感

謝の信念を述べたものである。

第二段に於ては、地上のあらゆる生物は、太陽の熱と光とのおかげで生きてゐる。「太陽はあらゆる生命の源泉である」と、太陽に對する人類の信仰を最も端的に表はしてゐる。

第三段は本文の主要部をなすもので、太陽の偉大性を、各面にわたつて具體的に直觀的に述べて、兒童の理解を容易ならしめてゐる。先づはじめに太陽の偉大な存在として、直徑約百四十一萬軒もある一大火球だといつてゐる。しかし、これだけを聞いても、果してどの位の大きさは全く想像も出来ない。これを具體化して(一)月と地球との距離を考へさせて圓をかいで見ると、太陽はどれ位の大きさになるかと考察させ、(二)又、小さくして見て月をピンポン玉とし、地球をゴム毬とし、太陽はどの位の大きさになるかと考へさせ、太陽は、直徑十三米の大圓となるので、ちよつと手近にたとへるものゝないのに驚かせ、(三)には、太陽と地球との距離は一億五千萬軒で、月への距離の四百倍といふことによつて驚異させ、更に神風のやうな一時間三百軒の速さの飛行機でも五十七年もかゝるといふに至つてはたゞ驚嘆の外はない。其他、太陽の出す熱とその溫度、光の強さ、太陽の黒點の大きさ、増減の周期については、その具體化をはかつてゐる。最後の段に於ては、文の結びとして、宇宙の廣大無邊を述べてゐる。此の大きな太陽も、夜の空に無數に輝く星の一つで、廣い宇宙には、太陽と同じやうな天體が殆ど數へきれない程存在する。その中には太陽の數百倍といふすばらしいものがあるといふに至つてはたゞ宇宙の廣大無邊、崇高偉大にして無限の力をもつものであることに感じさせなければならぬ。

讀本指導と朗讀法

本文

ダイ ニジュー ニ、ダイヨ。

ワタクシ タチ ジンルイニ トツテ、イナ。スベテノ  
セーブツニ トツテ、タイヨホド アリガタイ モノ  
ガ アルダローカ。

タイヨワ、ワタクシ タチニ タエズ ネット ヒカ  
リトオ オクツテ ヨコス。チジョーノ アラユル セー  
ブツワ、コノ ネット、コノ ヒカリノ オカゲニ イキテ  
イルノデ アル。ツキワ シノ セカイデ アルト ユ  
ー コトオ。ワタクシ タチワ スデニ シツタ。タイヨ  
ー コソワ アラユル セーメーノ ゲンセン ナノデ  
アル。

二六〇  
朗讀上の注意

○「源泉」を單獨にいふ時、アクセントはゲン  
センとなる。

アラユル セーメーノ ゲンセンデ アルダケニ、ソレ  
ワ マタ ジツニ イダイナ ソンザイデ アル。チョッ  
ケー オヨソ ヒヤク シジューマンキロメートルモ ア  
ル イチダイ カキューダト ユー。モチロン、コーイ  
ツタ ダケデワ ホトンド ケントーガ ツカナイ。ツキ  
ワ、チキューオ チューシン トシテ グルグル マワッ  
テ イル。イマ カリニ ソノ ママ ソックリ ウツシ  
テ、チキューオ タイヨーノ チューシンニ オクトシ  
テモ、ツキワ タイヨーノ ナイブオ マワル ダケデ  
アル。チキュート ツキトノ キヨリガ イマノ ヤク  
ニバイ ナクテワ、ツキガ タイヨーノ ヒョーメンオ  
マワル ワケニワ イカナイ。マタ ツキオ チョウケ  
サン センチメートルノ ビンボンノ タマ、チキュー  
オ ジューニ センチメートルノ ゴムマリ トシテ ミ

第二十二太

二六一

テモ、タイヨ<sup>1</sup>ーワ チョッケー ジューサン メートル  
 トユー オーキナ モノニ ナッテ、チヨット テジカ  
 ニ タトエル モノガ ミツカラナイ。<sup>2</sup>  
 コノ オーキナ タイヨ<sup>1</sup>ーガ ワタクシタチノ スム  
 チキユーカラ ミルト、ダイタイ ツキト オナジ オー  
 キサニ ミエルノワ、ユーマデモ ナク タイヨ<sup>1</sup>ーガ ツ  
 キヨリ ヒジヨ<sup>1</sup>ーニ トーイ トコロニ アルカラデ ア  
 ル、チキユーカラ タイヨ<sup>1</sup>ーエノ キヨリワ オヨソ イ  
 チオク ゴセンマン キロメートルデ、ツキエノ キヨリ  
 ノ ヤク ヨンヒヤク バイニ アタル、イチジカン サ  
 ンビヤク キロメートルノ ハヤサデ トブ ヒコーキニ  
 ノッテ イク トシテモ、ザット ゴジュー シチ ネ  
 ン カカル ワケデ アル。<sup>3</sup>  
 コレホド トーイ トコロニ アリナガラ、タイヨ<sup>1</sup>ーワ

○「夏の日」を別々にいふ時、アクセントは  
 ナツノ ヒとなる。

ワタクシタチニ ジューブンナ ネツト ヒカリトオ  
 オクツテ クレル、ナツノ ヒノ アツサカラ カンガエ  
 テ ミテモ ワカル ヨーニ、タイヨ<sup>1</sup>ーカラ デル ネツ  
 リヨ<sup>1</sup>ーワ スバラシー モノデ アル、タイヨ<sup>1</sup>ー ソノ  
モノノ オンドワ、ヒョーメンデ ヤク ロクセン ド。  
 ナイブワ モツト モツト コーネツデ アル。  
ヒカリノ ツヨサニ イタツテワ、ホトンド フツーノ  
コトバデ イー アラワス コトガ デキナイ、コレオ  
 ショツコーデ アラワスト、ソノ スーワ、サンノ ツ  
 ギニ レーオ ニジュ<sup>1</sup>ー シチ ツケタ モノニ ナル。  
コイ イロ ガラス、マタワ クロク イブシタ ガラ  
 スオ トーシテ タイヨ<sup>1</sup>ーオ ミルト、ヒョーメンニ ク  
ロイ ゴマツブノ ヨーナ モノガ ミエル コトガ ア  
 ル、ソレガ タイヨ<sup>1</sup>ーノ コクテント ヨバレル モノデ、

○「色ガラス」を別々にいふ時、アクセントは  
 イロ ガラスとなる。

○「胡麻粒のやうな」を續けていふ時、ヨーナ  
 のアクセントはあまり高くない。

ミタ トコロ ゴマツブノ ヨーダガ。ジツワ チキユー  
ヨリ オーキイノガ アリ。トキニワ チキユーノ ジュ  
ースーバイニ タツスルノガ アラワレル コトガ アル。  
コクテンワ タイヨノ ヒョーメンニ ショーズル オ  
ーキナ ツムジカゼ ダト イワレ。ソノ カズヤ オー  
キサワ。オヨソ ジュー イチ ネンオ シューキト シ  
テ ゴーゲン シテ イル。

タイヨノ ヨーナ テンタイワ。タダ ヒトツ アル  
ダケデ アローカ。カリニ。タイヨオ モット モツ  
ト トーイ トコロデ ミルト スレバ。ケツキヨクワ  
アノ ヨルノ ソラニ ギンノ スナゴオ マイタト ミ  
エル チーサナ ホシト オナジ モノニ ナツテ シマ  
ウデ アロー。ツマリ タイヨワ。ヨルノ ソラニ ム  
スーニ カガヤク ホシノ ヒトツ ナノデ アルガ。ワ

○「太陽のやうな」を續けていふ時、ヨーナの  
アクセントはあまり高くない。

レワレニ チカイ タメニ トクニ オーキク アカルク  
ミエルニ スギナイ。ヒロイ ヒロイ ウチユーニワ  
タイヨート オナジ ヨーナ テンタイガ ホトンド カ  
ゾエ キレナイ ホド ソンザイ スル。ソーシテ ソノ  
ナカニワ タイヨヨリ チーサイ モノ。タイヨート  
ホボ オナジ オーキサノ モノモ アルガ。マタ タ  
イヨノ スー ヒヤク バイト ユー スバラシー モ  
ノガ アルノデ アル。

○「ものもあるが」を續けていふ時、アルガの  
アクセントはあまり高くない。  
○「あるのである」を續けていふ時、アルのア  
クセントはあまり高くない。

指導概要

(一) 教材

- (1) 第一次には読みを主として文字語句を取扱ひ文の概観をさせる。  
文字としてはたゞ零の新字が一字、讀替として否、凡、球の三字があるだけで、文字の負擔は極めて少い。繰  
返し讀ませて、説明されてゐる内容事項の把握に力を注ぐがよい。
- (2) 第二次の取扱としては文について内容の究明を行ひ、

- (一) 先づはじめに、人類が太陽に對してありがたいと感ずるのはどんな點からか、それが、文のどこに、どんな言葉を使つてかゝれてあるかを考察させ。
  - (二) 次に太陽があらゆる生命の源泉だといはれるそのわけ、そしてそれが文のどこにあるか。
  - (三) には、太陽が偉大な存在をなすわけ、又、それが文のどこにあるかを考察させて表解させよ。
  - (四) 宇宙が廣大無限、崇高偉大な存在として感ぜられる點を考察させるがよい。
  - (3) 十分に朗讀を繰返して讀みの練熟をはかると同時に、内容的知識を確把させねばならない。
- (二) 挿畫
- 百六十二頁の挿畫は、月と地球と太陽との大きさの關係を示し其の軌道を表はすものである。
- (三) 準備
- 東京地方では本課指導の前後に、東日會館のプラネタリウム(天體望遠鏡)を見學させておくがよい。地方でも修學旅行の機會を利用して是非一度はこれを見學させたいものである。

## 第二十三 關 孝 和

### 一 要 旨

日本が生んだ數學界の偉人關孝和の天才によつて、和算が世界的水準にまで高められ、その独自の研究が文化史上に一大偉觀を誇つてゐることを知らせ、日本人の天才と練磨との功について認識を深め自覺を促し、學術文化に對する研究創造の精神を養ふ。

### 二 指導觀

- (一) 關孝和の數學界に於ける偉大な功績について語り、和算の極致が、世界の文化史上に輝く進歩を遂げたことについて理解させ、天才の練磨によつて成された關流の和算術の概要を述べてその一般的知識を與へるとともに、獨創的研究の偉大さ貴重さについて感激を深め、新興東亞の將來の文化の爲に創造研究に邁進せんとする精神を養ふことが本課指導の主眼である。
- (二) 和算に關する内容上の問題にはこゝで深く入る必要はない。文意讀解上その要點を述べて、關孝和の偉さを理解させるのが眼目である。従つて大意を把握させるためには、文の順序に従つて、
- (イ) 算木、そろばんに關する概要。
  - (ロ) 孝和の創始した點竄術の概要。

(ハ) 孝和の考案した角術とその後繼者に關する概要。

の三つを主として、關流和算法の大體の構成要領を理解させることが肝要である。

(三) 孝和の研究し創始した和算の概要を理解させることによつて、日本人の天才と練磨とが驚嘆すべき偉力を發揮し、支那より輸入した算木、そろばんを容易に同化しつくして、支那以上の文化を創造し、又西洋の數學を容易に征服して、日本独自の數學學術上の急速な進歩を成し遂げたことについて、十分に認識と自覺とを深め、益々研究創造の氣象を培ふやうに、兒童をして感激感奮させるやう指導すべきである。

(四) 全文十三節より成り、第一節より第六節までは、支那より輸入したそろばんと算木とについて概要を述べ、支那に於ける算法の變遷と、これを輸入して、遂に世界的水準にまで發達を遂げ、日本の數學即ち和算の基礎を確立した關孝和の力を記してゐる。

第七節から第十二節までは、孝和の創始した關流の和算の概要を説き、七・八節では、算木を筆算の方法に改めた點竄術のこと、九節では正多角形に關する算法即ち角術のこと、十・十一・十二の三節では、孝和及びその後繼者によつて築かれた独自の天地が、西洋の高等數學にも劣らぬ文化史上の一大偉觀を示したことを述べてゐる。

第十三節は全文の結びで、和算に發揮された日本人の天才と練磨との力で、西洋の數學を征服して一大進歩を遂げた所以を述べ、感激を深め、自覺と奮起とを促す一大暗示を含めて力強くこの一文をまとめてゐる。

朗讀

本文

ダイ ニジュー サン、セキタカカズ。

ニッポンガ ウンダ スーガク カイノ イジンニ、セ  
キタカカズト ユー ヒトガ アツタ、ニヒヤク スー  
ジュー ネンノ ムカシニ デテ、ニッポン ノ スー  
ガク、スナワチ ワサンノ キソオ カクリツシタ ヒト  
デアル。

ワサント イエバ、アルイワ ソロバンニ ヨル サン  
ポーノ コトダト カンガエル ヒトモ アロー、シカ  
シ、タカカズワ ケツシテ ソロバンオ コーアンシタ  
ヒトデモ ナケレバ、ソロバンノ タツシヤデ アツタ  
カラ エライ トユー ワケデモ ナイ。

朗讀上の注意

○「人である」を讀けていふ時、アルのアクセントはあまり高くない。

讀本指導と朗讀法

ワガクニワ、モトシナカラスーガクオマナン  
 ダ、シナデワ、コライサンギトユーモノオツカッ  
 テ、カケンジョージョヤ、カイヘー、カイリツトーノ  
 サンポーオオコナツテキタノデアルガ、イマカラ  
 オヨソロクシチヒヤクネンマエニイチジル  
 シクハツタツシテ、ソレガダイスーガクニマデタ  
 カメラレルヨーニナツタ、  
 トコロデ、シナデワソノコロソロバントユー  
 モノガコーアンサレ、リユーコーシハジメタ、ソーシ  
 テ、ソレガニチジョーノケーサンニヒジョーニ  
 ベンリナモノデアツタタメ、イツノマニカソロ  
 バンノミガモチーラレ、サンギニヨルムズカシー  
 スーガクワゼンゼンワスレラレテシマッタノデア  
 アツタ、

○「開立」を單獨にいふ時、アクセントはカイリツである。

○「高められるやうに」を續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くない。

○「非常に便利」を別々にいふ時、アクセントはヒジョーニベンリとなる。

ニッポンワ、シナノサンギニヨルサンポーオマ  
 ナブトトモニ、ソロバンオモマタワガセンゴク  
 ジダイニワ、スデニユニユーシテイタノデア  
 カノクニノヨーニ、サンギニヨルホーホーオス  
 テテシマウコトワナカッタ、ステナカッタバカリ  
 カ、コノホーホーカラミテヒキダサレタワガクニ  
 ノスーガクワ、エドジダイニデタセキタカカズ  
 ノテンサイニヨツテ、セカイテキスイジュンニマ  
 デタカメラレタノデアツタ、  
 サンギトユーノワ、ナガサシゴセンチグライノ  
 シカクケーノキデアル、コレオパンノウエニタ  
 テニイッポンオケバ、イチ、ニホンナラベテオケ  
 バ、ニ、ゴホンナラベテオケバゴオアラワス、ロ  
 クイジョーワオキカタオヤヤコトニスルガ、ヨ

○「戦國時代」を別々にいふ時、アクセントはセンゴクジダイとなる。

○「彼の國のやうに」を續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くない。

○「水準にまで」を別々にいふ時、アクセントはスイジュンニマデとなる。

○「本である」と續けていふ時、アルのアクセントはあまり高くない。

ー|スルニ コーシテ イチカラ クマデノ スーオ アラ  
 ワシ ウルト トモニ、コレオ シュジュニ ナラベ、マ  
 タ ヘンカ サセル コトニ ヨツテ、オーキナ スーヤ  
 シキオ アラワシ、カツ エンザンスル コトガ デキ  
 タノデ アル。  
 タカカズワ、コノ サンギオ オク ホーホーカラ カ  
 ンガエ ツイテ、スーヤ シキオ カミノ ウエニ カキ  
 アラワシ、サラニ モンジオ キゴー トシテ ツカウ  
 コトオモ クフー シタ、コーシテ、カレワ マズ シナ  
 デンライノ サンギニ ヨル ホーホーオ、カミニ カ  
 キ アラワス ヒツサンノ ホーホーニ アラタメタノ  
 デ アルガ、ソノ ケツカワ シキモ エンザンモ ジュ  
 ー ジザイト ナリ、シタガツテ イママデ クワダテ  
 オヨバナカッタ スーガク ジョーノ コトガラガ、ツギ

○「紙の上」を別々にいふ時、アクセントはカ  
 ミノウエとなる。

カラ ツギエト カイケツ サレル ヨーニ ナツタ。  
 ヨニ タカカズノ ソーシスル トコロオ テンザンジ  
 ヌツト ユー、テンザンジュツワ、ヨースルニ ヒツサン  
 ニ ヨル ダイスーガクデ アツテ、コレニ ヨツテ、シ  
 ナノ スーガクガ イマダ カツテ オヨビ エナカッタ  
 タカイ イキニ マデ ススム コトガ デキタノデ  
 アル、ソーシテ トージノ セーヨーオ ノゾケバ、カク  
 ダイスーノ エンザンガ ジザイニ オコナワレルノワ、  
 ヒトリ ワガクニ ノミデ アツタ。  
 タカカズワ、マタ セー サンカクケー、セー シカク  
 ケー、セー ゴカクケー ナドノ セー タカクケーニ  
 カンスル サンポーオ コーアンシ、コレオ カクジュツ  
 ト ショーシタガ、コーユー モノワ、モチロン カレ  
 イゼン シナニモ ニッポンニモ ナカッタ トコロデ

○「解決される」を別々にいふ時、アクセント  
 はカイケツ サレルとなる。

○「代数学であつて」を續けていふ時、アツテ  
 のアクセントはあまり高くない。

○「出来たのである」を續けていふ時、アルの  
 アクセントはあまり高くない。

○「::のみであつた」を續けていふ時、アツタ  
 のアクセントはあまり高くない。

○「ところである」を續けていふ時、アルのア  
 クセントはあまり高くない。



アル。

タカカズノ テンサイワ、エンヤ キュー ナドノ サ  
ンポーオ クフー スルニ オヨンデ、イヨイヨ コーミ  
ヨーナ ハタラキオ ミセタ、ソーシテ、ソノ キョクチワ、  
カレノ コーケーシャニ ヨツテ、ツイニ セーヨーノ  
ビブン セキブンニ タイヒ スベキ モノニ マデ オ  
シ ススメ ラレタ。

イワユル ビブン セキブンワ、タカカズト チョード  
オナジ ジダイニ、イギリスノ ニュートン、オヨビ  
ドイツノ ライブニッツニ ヨツテ ソーシ サレタ コ  
ーキューノ スーガクデ アル、シカシ カレラガ コー  
ユー モノオ ウミ ダシタ ノニワ、セーヨー ショコ  
クノ ガクジュツノ ハイケーガ アリ、スーガクノ ナ  
ガイ レキシガ アツタ カラデ、ムシロ トーゼンノ

○「同じ時代」を別々にいふ時、アクセントは  
オナジ ジダイとなる。

ミチオ ススンダ モノト イエル、ヒトリ ワガ タカ  
カズニ イタツテワ、セーヨーノ スーガク、ガクジュツ  
ト ナンラ カンケースル トコロ ナク、ヒタスラ ワ  
サンニ ドクジノ テンチオ ヒライタ ノデ アツテ、  
マコトニ プンカ シジヨーノ イチ ダイ イカンデ  
アルト イワネバ ナラス。

タカカズノ モンカニワ イクタノ ジンブツガ デテ、  
シテ アイ ウケ アイ ツイデ、ワサンワ イヨイヨ  
シンキョーオ ミセタ、ヨニ コレオ セキリユート  
シヨシ、タノ ショリユーニ ヒシテ イチジルシク  
カクオ アラワシテ イタ。  
メージニ ナツテ、セーヨーノ スーガクガ ユニユー  
サレルト トモニ、セキリユーオ ハジメ ワサンノ  
シヨリユーワ オノズカラ スタレタ、ソレワ、トージ

○「文化史上」を別々にいふ時、アクセントは  
ブンカ シジヨーとなる。

ニッボンガ マナバネバ ナラナカッタ セーヨー ショ  
 シュノ ガクジュツオ サイヨー スル タメ。スーガク  
 モ マタ セーヨーノ スーガクニ ヨラナケレバ ナラ  
 ナカッタ カラデ。マコトニ ゼヒモ ナイ コトデ ア  
 ッタ。シカシ、ワサンニ カクモ ハツキ サレタ ニッ  
 ボン ジンノ テンサイト レンマガ アツタレバ コソ。  
 ワガ コクジンガ セーヨーノ スーガクオ ヨーイニ  
 セーフク シテ、キューソクノ シンボオ ナシ トゲタ  
 ノデ アツタ。

指導概要

(一) 教材

- (1) 全文十三節八頁に亙る教材で、和算の概要を述べて一般的理解を與へつゝ關孝和の天才と功績とを讀へて感激を深めようとするのであるから、内容の補説や要語術語の説明によつて知的理解を主とする方面と、日本人獨自の天才的頭腦を讀へて學術研究の尊さにふれさせ、感銘感奮に訴へる方面とを渾然とした姿で調和よく指導

しなければならぬ。それには、傳記文的情熱に先づ讀みひたせるところから入つて、説明文の理智に融合させて行くことをねらふべきであらう。

- (2) この場合讀解の指導は、まづ全文の通讀を繰返すことより入つて、關孝和の和算の事業に對する大意を把握させ、次に分節の意味を概見して、これをまとめて、算木とそろばん、筆算による點算術、角術と關流の進歩、日本人の學術的天才と西洋の學問等の要項によつて、全文の機構を考察させ、文の順序に従つて、次第に文意を深究して行くことが肝要である。
- (3) 孝和の天才によつて創始された和算法の独自の境地を特に強くはつきりと讀取らせ、これを全文中から引き出して關孝和の天才の力を語句に即して讀取らせ、これを主としてその前後との比較、後世への影響等を研究させることは文意を確認させる上に最も必要なことである。
- (4) 日本人の天才の偉大さを感じさせる爲には、和算の發達と、その輸入元である支那文化との比較及び西洋の數學と孝和の算術法との比較について、これも全文中よりその敘述の要點を取り出して、中心となる語句をおさへながら、明瞭にこれを讀取らせることが必要である。この取扱は本文の文意を確把させる上に是非とも必要であり、結尾の節に於ける、將來の文化に對する示唆を意味あらしめる爲にも、効果ある方法であらう。

(二) 挿畫

百六十九頁、算木とその並べ方の例。

## 第二十四 白洲燈臺

### 一 要旨

白洲附近に難破する多くの船を見て、岩松助左衛門が、どうかしてかゝる不幸を除きたいと燈臺の建設を思ひ立ち、技術の甚だ幼稚な時代に、あらゆる困難と闘ひ、遂にその素志を貫徹することを得た先見と義氣と努力とを讀取らせ、その偉大な精神の力に感奮させる。

### 二 指導観

- (一) 本課は、白洲燈臺が如何にして建設せられたかといふこと、即ち我が國に於ける燈臺建設史の一頁とも見るべきもので、そこに、岩松助左衛門の先見と義氣のあつたことが中心として書かれてゐる。したがつてその精神をよく讀取らせることが大切である。
- (二) 文は、初に白洲附近の有様を書き、次に、岩松助左衛門がなぜ燈臺の建設を思ひ立つたか、その燈臺建設の事業が如何に容易でなかつたかを書き、最後に政府の事業として引取られ、完成するに至る顛末が書かれてゐる。この文の機構を捉へさせることが大切である。
- (三) 燈臺は、近代文明の施設として、海上生活者の爲に重要な役割を示してゐる。然るに多くの人々にとつて、それ程切實な感情を起さないのは、直接それ等の人々に取つて日常關係をもつてゐないからである。しかし一朝風浪が

起るとき、多くの難破船によつて、人々の命を失ひ、又風浪が起らなくとも航海の目標となつて海上交通の安全を保證してゐることを思ふとき、この燈臺建設が如何に重大な意義をもつてゐるかが、しみじみ考へられる。それだけ、岩松助左衛門の先見と義氣は尊く光つてゐるわけで、その點よくその境地に立たせて考察させることが大切である。

(四) 時代的背景をよく捉へさせることが大切である。即ち、幕末から明治の初にかけての、混乱の時代である。しかも技術の幼稚であつた時代、波浪の高い小島に燈臺を築くことの如何に困難であつたか。そこにも、助左衛門の精神がよくうかゞはれる。

(五) 「助左衛門が公共のため一身を捧げてかゝる難事業に當れるを見て、感歎止まざるものありき。」「かの助左衛門の苦を思へば、誰か其の先見と義氣に感ぜざらんや。」等の言葉をよく味ははせなければならぬ。

### 三 朗讀

#### 本文

ダイ ニジュー シ、シラス トーダイ。

コクラノ ホクセー ハチカイリノ カイジョーニ、ヘ  
ータンナル ショートー アリテ シラスト ユー、フキ

#### 朗讀上の注意

〔参考〕  
トーダイ(燈臺)  
トーダイ(當代)

○「平坦」のアクセントは單獨では「ヘータン」と平板である。

ンニ アンショール オーク、シユーコー ジザイナラズ、  
 シカモ、シモノセキ カイキョーオ シツニユースル セ  
 ンバクノ コーロニ セツスルオ モツテ、イニシエヨリ  
 ココニ ナンバスル モノ スコブル オーク、イッチ  
 ヨー フロー オコレバ、ジユクレンナル スイフト  
 イエドモ、ホトンド ソノ キケンオ サクル コト ア  
 タワザリキ。

コクラニ チカキ ナガハママムラニ、ナンバセン キユ  
 ー ジョガカリタリシ イワマツ スケザエモント ユー  
 ヒト、カカル フコーノ シバシバナナルオ ウレエ、イカ  
 ニシテカ コレオ ノゾカンモノト ココロオ クダク  
 オリカラ、イチジツ ボーフィーイタリ、マタモヤ シラ  
 スノ アンショールニ フレテ サイハセル フネ アリ、  
 シラスニ チカキ アイノシマノ ギョフ、マズ コレオ

○「下關海峡」を別々にいふ時、アクセントは  
 シモノセキ カイキョーとなる。

○「人」のアクセントはヒトと平板にもいふ。

スクワント シテ フネオ ダシタレドモ、ナニシオー  
 ゲンカイノ アラナミニ モテアツバレテ ススム コ  
 ト アタワズ、スケザエモン、ナミノ ヤヤ シズマルオ  
 マチテ、ギョフオ ハゲマシツツ シラスニ ムコー、  
 カロージテ イタレバ、シマニ ヒョーチャクセル ジユ  
 ーヨニン、レンジツノ クトーニ ツカレ、ウエニ クル  
 シミテ、ゴニンワ スデニ シシ、ノコレル モノモ イ  
 キ タエダエナル サマナリキ、  
 スケザエモンワ、フンゼント シテ トーダイ ケンセ  
 ツノ コトオ オモイタチヌ、ブンキユー ニネン、マズ  
 ハンチヨールニ ソノ ココロザシオ ウツタエテ キョ  
 カオ エシガ、トキ アタカモ バクマツニ シテ ジン  
 シン ドーヨーシ、トーター コノ シュノ ジギョーニ  
 チャクシユスルオ エズ、ムナシク トキノ イタルオ

〔参考〕  
 シマ(島・稿)  
 シマ(志摩)

○「うゑ」のアクセントはウエともいふ。  
 〔参考〕  
 イキ(息・意氣・域・壹岐)  
 イキ(行・粹)

○「文久二年」を別々にいふ時、アクセントは  
 ブンキユー ニネンとなる。

○「うったへて」のアクセントはウツタエテと  
 平板にもいふ。

○「あとかも」のアクセントはアタカモともい  
 ふ。

○「此の種の」を別々にいふ時、アクセントは  
 コノ シュノとなる。

讀本指導と朗讀法

マチテヨワ メージト ナレリヨ  
 メージ ガンネンカレ アラタメテ セーフニ トー  
 ダイ ケンセツノ コトオ シユツガンシヨヨク ニネン  
 ニ イタリテ ユルサルヨ  
 ハロー タカキ カイジョーノ ショートーニロ トーダ  
 イオ キズカント スルガ ゴトキワノ コンニチト イエ  
 ドモ ヨーイノ ワザニ アラズヨイワンヤ トージ ソ  
 ノ ギジュツ ハナハダ ヨーチナレバ クシンワ ホト  
 ンド ソーゾースベカラザル モノ アリヨアマツサエ  
 タカクノ ヒヨーオ ヨースル コトトテカレワ ナニ  
 ヨリモ マズ ソノ チョータツニ ホンソーセザルベカ  
 ラザリキヨ  
 ソーヨサン サンゼンリョーシザイオ コトゴトク  
 ナゲウツト イエドモジューガ イチニモ ミタズヨ

○「するが如きは」を別々にいふ時、アクセントはスルガ ゴトキワとなる。

○「容易のわざにあらず」と続けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くない。

〔参考〕

ヨイ(容易)

ヨイ(用意)

トージ(冬至・湯治・答辭)

トージ(當時・東寺)

○「あまつさへ」のアクセントは アマツサエともいふ。

ツテ アマネク セジンニ ウツタエテキフオ ツノラ  
 ント スシカモ ハカラザリキコノ キヨニ タイシ  
 テ ハンタイスル モノ ハナハダ オーカラントワケ  
 ダシ トージ ナンバセン シバシバ アレバコレガ  
 キュージョオ メーゼラレテアテオ ウクル コトモ  
 マタ シバシバナリスケザエモンノ ケーカクニシテ  
 ナランカカレラワ ミスミス コノ ガンゼンノリ  
 オ ウシナワザルベカラザリシナリヨ  
 スケザエモンヒタスラ カレラヲ セツトクセントテ  
 カクチニ ホンソーセシニギヨミンラ イカリテカ  
 レオ オドシハナハダシキワ カレオ キチニ オトシ  
 イレント スシカモ カレ クツセズシテ ボシューニ  
 ツトムルト トモニイッポ イッポ ソノ コンナン  
 ナル コージオ ススメタリキヨ

○「此の擧に」を別々にいふ時、アクセントはコノ キヨニとなる。

○「しば／＼」のアクセントは シバシバと平板にもいふ。

トキニ メージノ シンセー ヨーヤク ソノ ショニ  
 ツキ<sup>○</sup> トーキョク カクチニ トーダイオ モークル  
 ヒツヨ<sup>○</sup> オ ミトメテ<sup>○</sup> ソノ チョーサオ カイシス<sup>○</sup> カ  
 クテ シラスオ シサツセシ カンリワ<sup>○</sup> スケザエセンガ  
 コーキョ<sup>○</sup> ノ タメ イツシンオ ササゲテ カカル  
 ナンジギョ<sup>○</sup> ニ アタレルオ ミテ<sup>○</sup> カンタン ヤマザル  
 モノ アリキ<sup>○</sup>

○次の言葉をそれ／＼続けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「止まざるものありき」

「事業として引取られぬ」

シラス トーダイノ ケンセツワ<sup>○</sup> セーフノ ジギョ<sup>○</sup>  
 ト シテ ヒキトラレヌ<sup>○</sup> スケザエモン<sup>○</sup> ハンセーノ コ  
 コロザシ ジツゲンスルノ チカキニ アルオ ヨロコビ  
 タリシガ<sup>○</sup> メージ ゴネン<sup>○</sup> イマダ ソノ ナルオ ミズ  
 シテ シセリ<sup>○</sup> トキニ ロクジュー キューサイナリ<sup>○</sup> セ  
 ーフ<sup>○</sup> カレノ ココロザシオ アワレミ コーセキオ ヨ  
 ミシテ<sup>○</sup> イゾクニ オンショ<sup>○</sup> オ オクリヌ<sup>○</sup>

四 指導概要

(一) 教材

シラス トーダイワ<sup>○</sup> メージ ロクネンニ コーオ オ  
 エ<sup>○</sup> ソノ ノチ マタ カイチクセラレテ コンニチニ  
 イタル<sup>○</sup> シモノセキ カイキョー ニシグチニ アタリテ  
 メーメツスル トーカオ ノゾミツツ<sup>○</sup> カノ スケザエ  
 モンノ ムカシオ オモエバ<sup>○</sup> タレカ ソノ センケン  
 ト  
 ギキニ カンゼザランヤ<sup>○</sup>

(1) 先づ白洲燈臺の位置、どこにあつてその附近はどんなであるか。航海をする船にとつて、どんな重要さをもつてゐるかなどを、地圖によつて調べさせる。

(2) 第一次指導に於ては次の指導を行ふと共に、なぜ岩松助左衛門がこの地に燈臺建設のことを思ひ立つたか、當時の世の中はどうであつたか、建設のためにどんな苦心をしたかなどについて文意を概観させ、第二次指導に於ては概観した文意を基礎として、丹念に精査を続け、主としてその困難な有様や、困難に屈せず大事業を成遂げようとする助左衛門の尊い精神を捉へさせ、第三次指導に於ては更にそれ等の精査を通して、文意を確認させるやうにする。

- (3) 文意は「下關海峡西口に當りて明滅する燈光を望みつゝ、かの助左衛門の苦を思へば、誰か其の先見と義氣に感ぜざらんや。」といふ最後の一節の中に盛られてをり、其の先見と義氣によつて、事業を完成するために、如何なる困難努力がはらはれたかといふことがこの文の重要な敘述となつてゐる。
- (4) 白洲燈臺建設に於ける岩松助左衛門の先見と義氣とをよく味ははせなければならぬ。
- (5) 新出文字 船 浪 可 搖 府 募 緒 査 滅の九字、讀替文字は碎 許 財 募 共の五字である。
- (6) 語句、平坦、暗礁、舟行自在ならず、難破、一朝、暴風至り、名にし負ふ、からうじて、漂着、奮然として、落聽容易のわざにあらず、いはんや、幼稚、あまつさへ、調達、十が一にも満たず、はからざりき、此の擧に對して、けだし、みすく、危地におとしれんとす、其の緒につき、難事業、半生の志、功績をよみして、遺族、恩賞をおくりぬ。明滅、先見、義氣、感ぜざらんや。
- (7) 注意すべき語句 (イ) 附近に暗礁多く、舟行自在ならず。しかも、下關海峡を出入する船舶の航路に接するを以て、古よりこゝに難破するものすこぶる多く、一朝風浪起れば、熟練なる水夫といへども、殆ど其の危険を避くること能はざりき。(白洲附近が如何に難所であり、又重要な地點であるかといふことがよくわかる。)
- (ロ) 波浪高き海上の小島に、燈臺を築かんとするが如きは、今日といへども容易のわざにあらず。いはんや當時其の技術甚だ幼稚なれば、苦心は殆ど想像すべからざるものあり、(當時の燈臺建設が如何に難事業であつたかを思はなければならぬ。)(ハ) 時に明治の新政やうやく其の緒につき、當局各地に燈臺を設くる必要をみとめて其の調査を開始す。かくて白洲を視察せし官吏は、助左衛門が公共のため一身を捧げてかゝる難事業に當れるを見て、感歎止まざるものありき。(助左衛門が如何に先見と義氣に富んでゐたかといふことがよくわかる。)

よくわかる。)

(二) 挿畫

百七十五頁は、明治六年竣工の白洲燈臺で、百七十八頁は其の後改築せられた燈臺である。

三 参考

白洲の暗礁

白洲の暗礁は小倉の海岸から約十六軒餘の海中にあつて、敷島の南方、若松市から西北方約八軒のところにある。西北は玄海灘、東南は關門海峡にはいる海上に當つてゐる。

白洲は長さ凡そ七十五間、横五十六間半全體が白砂の島で、一の瀬、かれいの瀬、さゞえの瀬、乗切りの瀬、大ひやの瀬、砂濱等が點々として暗礁を作つてゐるので、一度玄海灘の荒波が怒り、濃霧がとさすやうなことがあると、この暗礁のために、馴れた航海業者も坐礁難破することが多かつた。

第二十五 雪國の春

一 要旨

長い間雪に埋もれてゐた雪國にも、春が訪れて、自然が暖い喜びの心をもち上げて来る。そして室内から戶外へ、人の心も又明かるく自然と共にのびひろがる。さうした喜びの心を讀味ははせ、又新鮮な自然の心を捉へさせる。

二 指導観

(一) 雪國は冬が長い。その長い冬中戸外は蕭條たる雪に蔽はれ、自然も人も長い冬眠を餘儀なくせられるのである。それだけ待たれる春の喜びは一入深いものがあるであらう。「雪國の春」といふ題意の持つ深い喜びを先づさとらせなければならぬ。

(二) 「黒い土」「せり摘み」といふ二つの題によつて、雪國の春の喜びと、自然の姿があらはされてゐる。「黒い土」は、家を中心としたその周邊、即ち、家からのぞかれる空の白雲、窓一ぱいに降りそゞくやはらかな日さし、かさり、かさりと音を立ててくづれる雪、まぶしく輝きながら、ちよろちよると流れる雪どけの水、それから庭におり立つた種々のながめや行動、更に垣に沿うた山路をとんで行く弟の姿などが取材されてをり、作者は女の子である。如何にも細かな新鮮な自然の姿と喜びが述べられてゐる。

又「せり摘み」は、廣々とした野に於ける母と子の行動を中心とした春の新鮮な心で、作者は男の子である。「せり摘み」といふ言葉が何となく、生々した心持を與へる。

そしてこの二つの題によつて示された雪國の春の、豊かな喜びの心を味はせなければならぬ。

(三) 文はいかにも細かく、感覺や感情がよく捉へられてゐる。即ち次の如きものであらう。よく味はせなければならぬ。「春の國から生まれて来たかと思はれる白雲が、山のふところからぼつかり顔を出しては、見る間に大きくふくらんで輕さうに浮いて行く。」「やはらかな日さしが、窓一ぱいに降りそゞく。縁先の雪が、かさり、かさりと音を立ててくづれる。くづれた雪は、やがて雨落ちのみぞにとけ込んで、銀絲のやうにまぶしく輝きながら、ちよろちよると流れて行く。」「松の根もとに、そつと顔を出してゐる黒い土を見つけた。もうじつとしてはみられない。私

は、其の土をしつかりと握つてみた。さうして、此の一握りの土に、ほのかな春の香を感じるやうにさへ思つた。」「清水の流れだといふ此の川べりは、もう殆ど雪がなくなつて、雜草が一面に芽ぐんでゐる。草の芽の間から立上る水蒸氣のかけもなつかしい。」「母の指先が水にはいると、川底のせりの緑も、高いはんの木の影も、ゆら／＼揺れて一つになる。」「足もとからほく／＼と濁つて湧上つた水が、すぐに流れ澄んで、せりの葉並が一そう美しく見える。」「(四) 雪の中から出て来たお人形を抱きあげる妹や、「もういゝかい。」と家のまはりにかくれんぼする弟たちや、「せり摘み」に於ける人々の行動の間に、如何にも人情がよくうつされてゐる。この人情と自然とが結び合つて、限りない春の喜びを感じさせるのであつて、さうした點をよく味はせなければならぬ。

(五) 素材と表現との關係についてよく味ははせ、綴方と關係を持たせることが大切である。

三 朗讀

本文

朗讀上の注意

ダイ ニジュー ゴロユキグニノ ハル

○春を迎へる喜びの心をこめてほがらかに讀むがよい。

クロイ ツチ

コイ アオゾラニワノ ハルノ クニカラ シマレテ キ

第二十五 雪國の春

二八九



タカト オモワレル シラクモガ、ヤマノ フトコロカラ  
 ポツカリ カオオ ダシテワ、ミルマニ オーキク フ  
 クランデ カルソーニ ウイテ イク  
 ヤワラカナ ヒザシガ マド イッバイニ フリソソグ  
 エンサキノ ユキガ、カサリ、カサリト オトオ タテテ  
 クズレル、クズレタ ユキワ ヤガテ アマオチノ ミ  
 ゴニ トケコンデ、ギンシノ ヨーニ マブシク カガヤ  
 キナガラ、チヨロチヨロト ナガレテ イク  
 カゼワ マダ ウラサムイ、ケレドモ、イエイエノ マ  
 ドモ ショージモ イッセーニ アケハナサレテ、ドコカ  
 ラカ カナリヤノ サエズリガ ホガラカニ キコエテ  
 クル  
 ニワニ オリタッタ ワタクシワ、アラナワデ エダオ  
 ツッタ マツノ ネモトニ、ソツト カオオ ダシテ

○「かきり」はアクセント不定。

イル クロイ ツチオ ミツケタ、モー ジツト シテワ  
 イラレナイ、ワタクシワ ソノ ツチオ シツカリト  
 ニギツテ ミタ、ソシテ、コノ ヒトニギリノ ツチニ  
 ホノカナ ハルノ カオ カンズル ヨーニ サエ オ  
 モツタ  
 ネエサン、ユキノ ナカカラ オニンギョーガ デテ  
 キタノ  
 ノンキナ シュジンニ オキワスレラレ、ユキニ ソマツ  
 テ フエオ コシタ ニンギョーガ、ソレデモ アタタカ  
 ソーナ カオオ シテ、イモートノ チーサナ テニ ダ  
 カレテ イタ  
 ソノヘンオ アンマリ アルイチャ イケマセンヨ、シ  
 ヤクヤクヤ スイセンガ、ユキノ シタデ、モー メオ  
 サマシテ イルノデスカラ

○「握つてみた」を別々にいふ時、アクセントはニギツテミタとなる。

〔参考〕カ(香・蚊)カ(佳・可)

○「出て来たの」の終りは下り調子に讀むべきである。

○「いけませんよ」の終りは上り調子、「ゐるのですから」の終りは下り調子にいふ。

フシギソニー アタリオ ミマワシテ イル イモートニ  
 ホーエミナガラ ワタクシワ コー イッタハチキレル  
 ヨーナ メオ モタゲユキオ ワツテ ノビデヨート  
 シテ イル モノノ ハツラツタル チカラオ ソーゾ  
 シナガラ  
 フトドロマミレノ ナガグツオ ハイタ オトートガ  
 セナカノ アタリマデ ドロオ ハネアゲテカキニ  
 ソータ コミチオ トンデ イクノガ ミエタソソノ  
 アトオ オツカケル ヨーニ  
 モー イーカイ  
 トコレワ マタ タイソー アカルイ コエガナヤノ  
 カゲノ アタリカラ ハズンデキタ  
 セリツミ  
 クワバタケノ ユキモ ダイブン ヘツテアチラコチ

〔参考〕  
 カキ(垣)  
 カキ(牡蠣)  
 カキ(柿)

ラニ クロズンダ ハタケノ ツチガ アラワニ デテ  
 イルズット ムコーニワカワベリニ ナランダ ハン  
 ノキガ メダツイチダント オーキナ ハンノキノ ア  
 イダニカブツタ シロイ テヌグイガ ミエル  
 オカーサン  
 オトートガ オーキナ コエデ ヨンダタツテ シバラ  
 ク コチラオ ミテ イタ ハガヒダリテオアゲタ  
 オトートガ カケダシタボクモ オトートノ アトオ  
 オウチカズイテカラ マタ オトートガ  
 オカーサン  
 ト イッタ  
 サンシヒヤクメートルモ ハシツタノデ アツクテ タ  
 マラナイウワギオ トツテ ハンノキノ シタエダニ  
 カケタカワノ スコシ カミテニヨソノ オバサンモ

○「おかあさん」の呼び聲はやゝのばして差支ない。

〔参考〕  
 アツクテ(熱くて)  
 アツクテ(厚くて)  
 カケタ(掛けた)  
 カケタ(缺けた)

セツセト セリオ ツンデ イル<sup>ル</sup>ボクラオ ミテ ニ  
 ッコリ シタノデ<sup>ル</sup>ボクワ ボーシオ トツテ オジギオ  
 シタ<sup>ル</sup>aaa  
 シミズノ ナガレダト ユー コノ カワベリワ<sup>ル</sup>モー  
 ホトンド ユキガ ナクナツテ<sup>ル</sup>ザツソ<sup>ル</sup>ガ イチメン  
 ニ メグンデ イル<sup>ル</sup>クサノ メノ アイダカラ タチノ  
 ボル スイジョーキノ カゲモ ナツカシ<sup>ル</sup>aaa  
 イツノマニカ ムコーガワニ イッタ オト<sup>ト</sup>トワ<sup>ル</sup>ツ  
 チアソビニ ヨネンガ ナイ<sup>ル</sup>ハハワ トキドキ オト<sup>ト</sup>  
 トノ ホーオ ミテワ マタ セリオ ツム<sup>ル</sup>ハハノ ユ  
 ビサキガ ミズニ ハイルト<sup>ル</sup>カワゾコノ セリノ ミド  
 リモ タカイ ハンノキノ カゲモ<sup>ル</sup>ユラユラ ユレテ  
 ヒトツニ ナル<sup>ル</sup>  
 ボクモ<sup>ル</sup>ナガグツオ ハイタ ママ シモテノ アサセ

○「何時の間にか」を二語の如くいふ時、アク  
 セントは イツノ マニカとなる。

ニ ハイッタ<sup>ル</sup>アシモトカラ ムクムクト ニゴツテ ワ  
 キアガッタ ミズガ<sup>ル</sup>スグニ ナガレ スンデ<sup>ル</sup>セリノ  
 ハナミガ イツソ<sup>ル</sup>ウツクシク ミエル<sup>ル</sup>テオ イレル<sup>ル</sup>  
 ミズワ オモッタヨリ ツメタカッタ<sup>ル</sup>スンダ ミズノ  
 イロ<sup>ル</sup>カワベリノ クロイ ツチ<sup>ル</sup>クサノ メノ ミドリ<sup>ル</sup>  
 コノ サンシカゲツ ツチオ ミル コトノ デキナカツ  
 タ メニワ<sup>ル</sup>ミナ タマラナク ナツカシ<sup>ル</sup>aaaダイシゼン  
 ワ<sup>ル</sup>イマ ハルノ ヨロコビト カツド<sup>ル</sup>ニ ヨミガエロ  
 ート シテ イル<sup>ル</sup>ダ<sup>ル</sup>ボクワ モー ジキ オトズレル  
 ハルオ カンガエナガラ<sup>ル</sup>アタリオ ミマワシタ<sup>ル</sup>  
 ハレワタッタ ソラニ<sup>ル</sup>シヨ<sup>ル</sup>ゴオ シラセル マチノ  
 サイレンガ ナガナガト ヒビ<sup>ル</sup>aaa

○「見廻した」は ミマ<sup>ル</sup>シタとなり易いが、  
 さうしないやうに注意を要する。

(一) 教材

第二十五 雪國の春

- (1) 本課は、新出漢字も少く、語句もやさしく書かれてゐるので比較的的理解し易いが、描寫が極めて繊細で感覺的な言葉が用ひられてゐるので、よく注意して創作的境地を指導しなければならぬ。
- (2) 先づ三時間乃至四時間を配當するのが適當であらう。三時間の場合は、第一時全課の通讀、第二時「黒い土」の精査並に味讀、第三時「せり摘み」の精査並に味讀を行ふ。又四時間の場合は、第一時通讀、第二時、「黒い土」の精査、第三時「せり摘み」の精査、第四時全課の味讀といふやうに指導するのが適當であらう。
- (3) 通讀に於ては、新出文字の指導、難語句の意味の指導、概意の把握等を行はせる。素材と作者と表現との關係を考察させ、この文が如何なる種類の文であるかを想定させることも大切である。
- (4) 精査に於ては、叙述を對象として、丹念に語句を調べさせ、如何なることが、如何に表現せられてゐるかについて考察させる。雪國の春の心持をよく表はした言葉を探へさせることが大切である。この文に於ては特にさうした雪國の春の心持や様子を表はした言葉が多く、そこにこの文の生命があるのである。
- (5) 味讀に於ては、第二次指導に於ける精査を通して、文の意味を探へさせることが大切である。即ちこの文に於ては、雪國の春の深い喜びと、天地の新鮮な喜びの姿である。それが如何に具象せられてゐるか、又具象せられたその姿から如何なる精神が深く感ぜられるかについて味ははせなければならぬ。更に作者の境地に立つて創作的な心境を探へさせることが大切である。
- (6) 新出文字は、摘の一字、讀替文字は搖の一字である。
- (7) 全文を貫く精神は、次の如きものであらう。「黒い土」に於ては、「庭におり立つた私は、荒なはで枝を釣つた松の根もとに、そつと顔を出してゐる黒い土を見つけた。もうじつとしてはゐられない。私は、其の土をしつかりと握つてみた。さうして、此の一握りの土に、ほのかな春の香を感じるやうにさへ思つた。」(新鮮な春の感じと、大地の呼吸がよくうつされてゐる。)又「せり摘み」に於ては、「澄んだ水の色、川べりの黒い土、草の芽の緑、此の三四箇月土を見ることが出来なかつた目には、皆たまらなくなつたかしい。大自然は、今春の喜びと活動によみがへらうとしてゐるのだ。」(こゝにも春の新鮮な喜びと大地の呼吸がきかれる。)

## 第二十六 靜 寬 院 宮

### 一 要 旨

大政奉還の後、未だ物情騒然たる時、殊に「慶喜討つべし。」といふ硬論が起つて、官軍が潮の如く東へ押寄せつゝあつた時、一女性の御身にあらせられながら、靜寬院宮が御身命をなげうつてのお働きにより、江戸百萬の市民が救はれ、危い日本の運命が救はれたその尊い宮の御事蹟と御精神とを讀取らせ、日本國民として宮の御功績を感謝し奉り、且つ日本婦道の御龜鑑と仰ぎ奉らしめる。

### 二 指導観

(一) 本課は物情騒然たる維新史を背景として、宮の御功績を書きあらはしたものであつて、歴史を除いては、宮の御精神と御事蹟をうかゞふことは困難であらう。したがつて當時の國情、諸外國との關係等を明かにしなければならぬ。

(二) 文は、宮の御功績を中心として書き、その御功績が、實に朝廷へ寛大の御處置を請ひ奉つた宮の御文にあつたことが明かにせられてゐる。そしてその御文こそ宮の尊い御精神であり、その御精神を謹んで深く拜察させなければならぬ。

(三) 「かう考へると、宮は一女性の御身で、徳川の家を救ひ、江戸市民を救ひ給うたばかりか、危き日本の運命をもお救ひになつたと言つて、決して過言ではないのである。」といふ最後の言葉が中心であり、その偉大な御功績が宮の御文によつて示されたこと、及びその御文が、宮の偉大な尊い御精神の發現である點をよく味はゞせなければならぬ。

(四) 五章に書かれてをり、(一)は鳥羽の戦に於ける徳川の敗戦と、慶喜は、はしなくも朝敵の汚名を受け、身は寛永寺の一院に閉ぢこもつてひたすら謹慎の意を表し、靜寛院宮に切に天朝へのおわびのお取成しを願つたことが書かれてゐる。(二)は宮の御境遇、(三)は宮の御決心と御盡力、(四)は宮の御文、(五)は宮の御功績について述べられてゐる。さうした表現の機構を捉へさせることが大切である。

朗讀

本文

ダイ ニジュー ロク<sup>〇</sup>セーカンインノ ミヤ<sup>〇</sup>

イチ<sup>〇</sup>

トバ フシミノ イッセンニ トクガワ ヨシノブワ<sup>〇</sup>  
 ハシナクモ チョーテキト ユー オメーオ コームッタ<sup>〇</sup>  
 スデニ タイセーオ ホーカンシタ カレニ<sup>〇</sup>ギヤクシ  
 ンナド アルベキデワ ナイガ<sup>〇</sup>シカシ ナニゴトモ ジ  
 セーデ アッタ<sup>〇</sup>チョーシンノ ナカニハ<sup>〇</sup>アクマデ ト  
 クガワオ ウタナケレバ<sup>〇</sup>ブケセージオ ドダイカラ ク  
 ツガエシテ<sup>〇</sup>シン ニッポンオ ウチタテル コトガ デ  
 キナイト スル コーロン アル<sup>〇</sup>バクシンニワ マタ<sup>〇</sup>  
 サンビヤクネンノ キューオンオ オモツテ<sup>〇</sup>シユクンノ

朗讀上の注意

○「汚名をかうむつた」と續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くない。

○「あくまで」のアクセントは アクマデともいふ。

〔参考〕

コーロン(硬論)  
 コーロン(口論)

パゼンニ ウチジニシナケレバ、イサキヨシト シナイ  
 ヤタケゴコロガ ミナギツテ イルカレワ ヨシノブ  
 ウツベシト サケビコレワ クンソク キヨムベシ  
 ト イキマク、リョーリョー アイウチ アイゲキシテ  
 ツイニ ホーカオ マジエ、シカモ トクガワガタガ  
 モロクモ ヤブレタノデ アルタトエ ヨシノブニ  
 シンノ ココロガ ナカッタト シテモ、チョーテキノ  
 ナオ コームルノワケダシ トーゼンデ アツタ  
 ヨシノブワ コトノ スコブル ジューダイナノオシ  
 ッテ、オーサカカラ カイロ エドエ カエツタ  
 カレワ セーカンインノ ミヤニ コトノ シダイオ  
 モーシアゲテ、セツニ テンチョーエ オワビノ オトリ  
 ナシオ ネガイ、ミワ カンエージノ イチインニ トジ  
 コモツテ、ヒタスラニ キンシンノ イオアラワシタ

○「いきまく」のアクセントは イキマクと平  
 板にもいふ。  
 ○次の言葉をそれ／＼続けていふ時、下の語  
 のアクセントはあまり高くならない。  
 「敗れたのである」  
 「當然であつた」

[参考]  
 ミ(身・實・已)  
 ミ(箕)  
 イ(胃・亥)  
 イ(意・異)

セーカンインノ ミヤ チカコ ナイシンノワ、ニン  
 コー テンノノ コー ジョ、コーメー テンノノ オ  
 ンイモート、メージ テンノノ オンオバギミデ、ゴヨ  
 ーミョーオ カズノミヤト モーシアゲタ、ミヤガ オン  
 アニ コーメー テンノノ ミココロオ ヤスンジタテ  
 マツリ、クニノ タメ タミノ タメニワ スイカノ ナ  
 カオモ イトワヌ オンカクゴデ、ショーグン イエモチ  
 ニ トツギタモータノワ、トージカラ シチネンゼンノ  
 コトデ アル、シカモ、コノ ゴコーカニ ヨル コー  
 イチワノ ノゾミワ、ホンノ ツカノマノ ユメデ ア  
 ッタ、ヤガテ チョーシユー、セーバツノ ダイジガ オ  
 コツテ、イエモチワ ソノ ジンチユーニ コージ、ツズ  
 イテ ツエ ハシラトモ タノミタモ、オンアニ、コー

○「安んじ奉り」を別々にいふ時、アクセント  
 は ヤスンジ タテマツリとなる。

○「長州征伐」を別々にいふ時、アクセントは  
 チョーシユー、セーバツとなる。

メー テンノーガ ホーギョ マシマシタ<sup>〇</sup>ミヤニワ<sup>〇</sup>コ  
 ノ リョーサンネン<sup>〇</sup> オンナミダノ カワク ヒマモ ナ  
 イ オンミデ アラセラレタ<sup>〇</sup>。  
 イタズラニ ウキ トシツキワ スグレドモ<sup>〇</sup> サメヌマ  
 ヨイノ ユメノ ヨノナカ<sup>〇</sup>。

サン<sup>〇</sup>。

ヨシノブ ハンギヤクノ ホーガ イチハヤク エドニ  
 タツシタ トキ<sup>〇</sup> ミヤワ サスガニ オンイキドーリオ  
 オカンジニ ナツタガ<sup>〇</sup> ヨシノブノ ゴンジョー  
 トコロオ イチイチ オキキニ ナルニ オヨンデ<sup>〇</sup> ジジ  
 ヨー ヤムオ エナカッタ カレノ シンチューオ アワ  
 レミタモ<sup>〇</sup> タ<sup>〇</sup> ヤサシー ニヨシヨ<sup>〇</sup> ノ オンココロニ  
 ネットカガ テンゼラレタ<sup>〇</sup> ワレ<sup>〇</sup> カタジケナクモ コーイ  
 ンニ ンマレタトワ イエ<sup>〇</sup> ヒトタビ カシテワ トクガ

○「いたづらに」からはゆつくりと感情をこめてよむ。

○「達した時」を別々にいふ時、アクセントはタツシタ トキとなる。

○「お聞きになるに」を別々にいふ時、アクセントは オキキニ ナルとなる。

ワノ イエオ ハナレヌガ オンナノ ミチ<sup>〇</sup> トクガワノ  
 イエワ ナントカシテ マモラネバ ナラヌ<sup>〇</sup> ソレバカリ  
 カ<sup>〇</sup> ツイトーノ カンダグが タチマチ エドオモテニ  
 オシヨセルト スレバ<sup>〇</sup> トクガワノ オンギオ オモ  
 キューシンタチガ<sup>〇</sup> オメオメト エドジョーオ アケワタ  
 ス ハズワ ナイ<sup>〇</sup> ソノ ケツカ<sup>〇</sup> エドシチューガ へ  
 カニ カカレバ<sup>〇</sup> ヒヤクマンノ シミンワ ドーナル コ  
 トカ<sup>〇</sup> トクガワノ イエオ スター コトワ<sup>〇</sup> ケツキョク  
 エド ヒヤクマンノ シミンオ スター コトデ ア  
 ル<sup>〇</sup> ミヤワ<sup>〇</sup> オンココロニ フカク ケツシタモ<sup>〇</sup> ト  
 コロガ アツタ<sup>〇</sup>。  
 イチジツ<sup>〇</sup> ジョーロー ツチミカド フジコワ<sup>〇</sup> ミヤノ  
 オンフミオ ホージシテ<sup>〇</sup> トーカイドーオ ニシエノ  
 ホツタ<sup>〇</sup>。

○「明渡す」のアクセントはアケワタスと平板にもいふ。

○「救ふことは」救ふことで」とそれ〴〵續けていふ時、コトのアクセントはあまり高くない。

カ|ン|グ|ン|ワ|イ|マ|ヤ ウ|シ|オ|ノ|ゴ|ト|ク ヒ|ガ|シ|エ|ヨ  
セ|ツ|ツ アル|<sup>〇</sup>ト|ク|ガ|ワ|ノ|イ|エ|ワ|マ|サ|ニ フ|ー|ゼ|ン|ノ  
ト|モ|シ|ビ|デ ア|ツ|タ|<sup>〇</sup>コ|ノ|ア|イ|ダ|ニ|モ|シ|ユ|カ|ノ|ナ  
ン|オ ス|ク|オ|ト|<sup>〇</sup>チ|ョ|テ|エ|カ|ン|ダ|イ|ノ|ゴ|シ|ョ|チ  
オ|コ|イ|タ|テ|マ|ツ|ル タ|ン|ガ|ン|シ|ョ|オ タ|ズ|サ|エ|タ|カ|ン  
ト|ー|ガ|タ|ノ|シ|シ|ヤ|ワ|ク|シ|ノ|ハ|オ ヒ|ク|ヨ|ー|ニ|キ  
ヨ|ー|ト|エ ム|カ|ツ|タ|ガ|イ|ズ|レ|モ ト|チ|ユ|ー|カ|ン|グ|ン|ニ  
オ|サ|エ|ラ|レ|テ|<sup>〇</sup>モ|ク|テ|キ|オ タ|ツ|シ|ナ|イ|<sup>〇</sup>プ|ジ キ|ョ|ー|  
ト|ニ ツ|ク コ|ト|ノ|デ|キ|タ|ノ|ワ|タ|ダ ミ|ヤ|ノ|オ|ン|ツ  
カ|イ フ|ジ|コ|ダ|ケ|デ ア|ツ|タ|<sup>〇</sup>

シ<sup>〇</sup>

ミ|ヤ|ノ|オ|ン|フ|ミ|ワ|ジ|ツ|ニ|ゲ|ン|ゲ|ン ケ|ツ|ル|イ|ノ  
ゴ|ブ|ン|シ|ョ|ー|デ ア|ツ|タ|<sup>〇</sup>  
ナ|ニ|ト|ゾ ワ|タ|ク|シ|エ|ノ|ゴ|レ|ン|ミ|ン|ト オ|ホ|シ|メ|サ|レ|。

○「寄せつゝある」と続けていふ時、アルのアクセントはあまり高くない。

〔参考〕

シ(四・死・氏・師・資)  
シ(詩)

オ|メ|ー|オ ス|ス|ギ|カ|メ|ー|ア|イ|タ|チ ソ|ー|ロ|ー|ヨ|ー|  
ワ|タ|ク|シ シ|ン|メ|ー|ニ|カ|エ ネ|ガ|イ|ア|ゲ マ|イ|ラ|セ  
ソ|ー|ロ|ー|<sup>〇</sup>ゼ|ヒ|ゼ|ヒ|カ|ン|グ|ン サ|シ|ム|ケ|ラ|レ|オ|ト  
リ|ツ|ブ|シ|ニ|ア|イ|ナ|リ ソ|ー|ラ|ワ|バ|ワ|タ|ク|シ|コ|ト|モ  
ト|ー|ケ メ|ツ|ポ|ー|オ|ミ|ツ|ツ ナ|ガ|ラ|エ|オ|リ ソ|ー|ロ|  
ー|モ ザ|ン|ネ|ン|ニ|ソ|ー|ロ|ー|マ|マ|キ|ツ|ト カ|ク|ゴ|イ  
タ|シ ソ|ー|ロ|ー|シ|ョ|ゾ|ン|ニ|ソ|ー|ロ|ー|<sup>〇</sup>ワ|タ|ク|シ|イ  
チ|メ|ー|ワ|オ|シ|ミ|モ|ー|サ|ズ|ソ|ー|ラ|エ|ド|モ|チ|ョ|ー|テ  
キ|ト ト|モ|ニ|シ|ン|メ|ー|オ|ステ|ソ|ー|ロ|ー|コ|ト|ワ|  
チ|ョ|ー|テ|エ|オ|ソ|レ|イ|リ|ソ|ー|ロ|ー|コ|ト|ト|マ|コ|ト  
ニ|シ|ン|ツ|ー|イ|タ|シ|オ|リ|ソ|ー|ロ|ー|<sup>〇</sup>シ|ン|テ|ユ|ー  
ゴ|レ|ン|サ|ツ|ア|ラ|セ|ラ|レ|ネ|ガ|イ|ノ|ト|ー|リ|カ|メ|ー|ノ  
ト|コ|ロ|ゴ|レ|ン|ミ|ン|ア|ラ|セ|ラ|レ|ソ|ー|ラ|ワ|バ|ワ|タ  
ク|シ|ワ|モ|ー|ス|マ|デ|モ|ナ|ク|イ|チ|モ|ン|カ|ボ|タ|ノ|モ

○「相立ち候」と続けていふ時、ソローのアクセントはあまり高くない。

○「せひく」の下のゼヒのアクセントはあまり高くない。

○「致し居候」を別々にいふ時、アクセントはイタシオリソローとなる。



ノドモ、フカク チョーオンオ アオギ ソーロー コ  
トト ゴンジ マイラセ ソーロー、  
トクガワオ ウタネバ ヤマヌノ コーロンオ ジスル  
チョーシンタチモ、コノ オンフミオ ハイケンシテ  
ヒトシク ナイタ、

トクワニ タイスル チョーギワ、コノ トキカラ  
イッペンシタ、ソレワ マツタク ギオ タテ、リオ、ツ  
クシ、ジョーオ ノベテ ノコルトコロ アラセラレヌ  
ミヤノ オンフミノ チカラデ アツタ、

ゴ、

チョーテキノ オメーワ ススガレ、トクガワノ カメ  
ーワ ダンゼツオ マヌカレタ、キューシンタチワ、ホッ  
ト アンドノ ムネオ ナデオロシタ、  
エドジョーワ カングンガタノ サイゴー タカモリ、

○「存じ參らせ候」と續けていふ時、マイラセ  
ソーローのアクセントはあまり高くならな  
い。

○「此の時から」を別々にいふ時、アクセント  
はコノ トキカラとなる。

トクガワガタノ カツ ヤスヨシノ ワズカ ニカイノ  
カイケンデ、シカモ ダンショーノ ウチニ カイジョー  
ノ ヤクガ セーリツシタ、

エドシミンワ へーカオ マヌカレタ、ソーシテ、サイ  
ワイワ タダ ソレダケデワ ナカツタ、トージ オーベ  
ーノ キョーコクワ、ヒソカニ ワガクニオ ウカガツテ  
イタノデ アル、ゲンニ フランスワ トクガワガタオ  
オーエンシ、イギリスワ サツチョーオ ツージテ カ  
ングンニ コーイオ ミセヨート シテ イタ、モシ、ニ

ツボンガ カングント チョーテキトニ ワカレテ、ナガ  
ク タタカウヨーニデモ ナツタラ、ソノ スキニ ジョ  
ージテ カレラワ ナニオ シタカワカラヌ、オモエバ、  
マコトニ アヤウイ コトデ アツタ、

コー カンガエルト、ミヤワ イチ ニョショトノ オ

〔参考〕

ヤク(約・譯)  
ヤク(役・厄)  
ヤク(焼く)

ンミデ、トクガワノ イエオ スクイ、エドシミンオ ス  
クイ タモータバカリカ、アヤウキ ニッボンノ ウンメ  
ーオモ オスクイニ ナッタト イツテ、ケツシテ カゴ  
ンデワ ナイノデ アル。

○「ないのである」と續けていふ時、アルのア  
クセントはあまり高くならない。

指導概要

(一) 教材

- (1) 靜寛院宮が、如何に尊い御身にあらせられながら、國家の大事にあたり、國を救ひ、民を救ひ、家を救ひ給はれたかといふ、日本婦道の御典型としての尊い御精神を中心として、全文の讀みを進めなければならぬ。
- (2) 五時間位配當するのが適當であらう。即ち、第一時は全文の讀み、第二時は(一)(二)の精査、第三時は(三)(四)の精査、第四時は(五)の精査、第五時は全文の味讀である。
- (3) 第一時に於ては先づ、鳥羽伏見の一戦を中心として、當時の日本がどんなであつたかについて、この文の背景となつてゐる歴史的事實を補説することが大切である。又、この課は何を表現したものであるかについての着眼及び文字の指導をする。
- (4) 第二時に於ては、本課の伏線としての鳥羽伏見の戦に於ける徳川慶喜の敗戦と、靜寛院宮に事の次第を申し上げ、切に天朝へのおわびの取成しをお願ひして、寛永寺にひたすら謹慎の意を表したこと及び宮の御境遇を文

の敘述にしたがつてよく理解させる。

- (5) 第三時に於ては、宮の御決心と言々血涙をもつて認められた宮の御文について、深くその御精神を捉へさせる。
- (6) 第四時は(五)を對象として宮の御功績をよく味ははせ、第五時は全課を總括して全文の機構、ことに文意を深く捉へせると共に讀みの修練をする。或はこの四・五時は時間の都合によつては一時間で持つてもよい。
- (7) 新出文字は、寛、汚、還、硬の四字、讀替文字は、靜、敗、嫁、嫁、討、潮、涙、誠、處の九字。
- (8) 語句 はしなくも、朝敵、汚名、逆臣、硬論、馬前、いさぎよし、やたけ心、君側清むべし。いきまく、天朝謹慎、公武一和、東の間、うき年月、言上、かたじけなくも、皇胤、おめおめ、風前の燈火、歎願書、櫛の齒を引くやうに、御憐愍、御憐察あらせられ、朝議、斷絶、安堵、過言ではない。
- (9) 中心語句 (イ) われ、かたじけなくも皇胤に生まれたとはいへ、……………徳川の家を救ふことは、結局江戸百萬の市民を救ふことである。——宮は、御心に深く決し給ふところがあつた。(宮の、家を救ひ、市民を救はうと深く御決心なされた烈々たる尊い御心を拜察する事が出来る。)(ロ)「何とぞ私への御憐愍と思召され、汚名をすゞぎ、家名相立ち候やう、私身命に代へ願ひ上げ参らせ候……………私は申すまでもなく一門家僕の者共、深く朝恩を仰ぎ候事と存じ参らせ候。」(言々血涙の御文章に、深く宮の御心を拜することが出来る。)

(二) 挿畫

百九十一頁は、宮が朝廷へ奉つた御文の筆蹟、百九十三頁は宮の御童形を寫し奉つた御人形である。

参考

靜寛院宮

第二十六 靜寛院宮

御名を親子、和宮と申上げ、仁孝天皇の皇女にましまし、弘化三年五月十日御降誕あらせられた。公武和協のため、萬延元年將軍家の熱望により、徳川家茂へ御降嫁の約が成り、文久元年京都を發し江戸に入り、二年二月御婚儀を行はせられた。時に御年十六歳、明治二年正月京都に御歸りになり、七年七月東京に出でられ、十年九月四日薨去あらせられた。御年三十二、東京市芝區増上寺に御墓所がある。

### 第二十七 山ざくら花

#### 一 要旨

徳川時代の中葉から、明治にかけての有名な歌人の歌により、我が國民文學としての和歌を味ははせ、文學精神を養ふと共に、和歌に盛られた繊細、優美、愛國等の、國民的情操を陶冶する。

#### 二 指導観

(一) 和歌は、最初卷九・第六「手まり」に於て良寛の歌が三首出され、次に卷十・第二十七に於て萬葉以後各時代(奈良・平安・鎌倉・徳川・明治)に於ける代表的な歌人と和歌が評釋の形で出され、卷十二に於ては、卷頭に長くも 明治天皇・昭憲皇太后の御製・御歌更に第十三萬葉集に於て、我が國に於ける和歌の聖典としての萬葉集の價值及びその歌人と作品、この第二十七「山ざくら花」に於て徳川時代中葉以降に於ける比較的新らしい時代の歌人とその歌が出されてゐる。これによつて我が國民文學としての特異性を持つ和歌は、一通り系統的に出されてゐるのである

から、始から纏めてよく考へさせることが大切である。

(二) 小學教育に於ける最初の國語が「サクラ」であり、最後を「山ざくら花」に結んだことも意義のあることである。又最初の「サクラ」が童謡であり、最後の「山ざくら花」が和歌であることも、文學的意圖を多分に持つ國語讀本として注意して眺めなければならないことである。しかしこの「山ざくら花」は、必ずしも、櫻のこのみを歌つたものではない。あらゆる和歌の領域が取入れられてゐる。即ち自然あり、人事あり、敘景あり、敘情あり、精神現象あり、愛國的思惟あり、各方面に互つて繊細、優美、豪壯、愛國等の精神が表現せられてゐる。したがつて文學的精神を味ははせると共に、さうした精神の薰陶を怠つてはならない。

(三) 言葉の感覺や感情をよく捉へさせることが大切である。又國民文學としての和歌の特性をもよく理解させ、更に延いてはその創作にまで發展させることが大切である。

#### 三 朗讀

##### 本文

##### 朗讀上の注意

ダイ ニジュー シチ、ヤマザクラバナ。

カモ マブチ。

ウラウラト、ノドケキ ハルノ ココロヨリ、ニオイ

〔参考〕

ハル(春)

ハル(張る)

第二十七 山ざくら花

讀本指導と朗讀法

イデタル ヤマザクラバナ

モトオリ ノリナガ

サシイズル。コノ ヒノモトノ ヒカリヨリ。コマモ

ロコシモ ハルオ シルラン

オザワ ロアン

チチハハノ。タビナル ワレオ オモラン。マツラン

サマノ オモカゲニ ミユ

カガワ カゲキ

フジノ ネオコノマ コノマニ カエリミテ。マツノ

カゲ フム ウキシマガハラ

カノー モロヒラ

カベ タテル。イワオ トーリテ アメツチニ。トドロ

○「おもかげ」はオモカゲともオモカゲと平板式にもいふ。

〔参考〕

フジ(富士・不時)

カゲ(藤)

○「壁立てる」を別々にいふ時、アクセントはカベ タテルとなる。

キワタル タキノ オトカナ

イデ アケミ

アリト アリ。ウナズキアイテ ナニカ コト、アリゲ

ニ ハシル ニシエ ヒガシエ

オークマ コトミチ

カサ サセル。ササヌモ スグル ハシノ ウエノ。ユ

ーグレ チカキ アメノ ハレガタ

ノムラ モト

クレナイノ。ヤマトニシキモ イロイロノ。イト マジ

エテゾ アヤワ オリケル

オータガキ レンゲツ

オトモ セズ。フルトモ ミエヌ アサジメリ。エダ

第二十七 山ざくら花

〔参考〕

ヒガシ(東)

ヒガシ(干菓子)

カサ(傘・笠)

カサ(嵩)

ハシ(橋)

ハシ(端)

ハシ(箸)

アメ(雨)

アメ(飴)

ハレ(晴)

ハレ(腫れ)

オモゲナル アオヤギノ イト。

タカサキ マサカゼ。

クニト ユー クニオ メグリテ ヒノモトノ。ヒトト

ンマレシ サチワ シリニキ。

四 指導概要

(一) 教材

- (1) 第一時に於ては、先づよく讀ませる。そして各歌について、その心持や精神などを想定させる。こゝに載せられてゐる作者や時代について簡単に述べて置くことも必要であらう。
- (2) 第二、三時は各歌について精査する。特に言葉について、その心、感覺感情などを仔細に味ははせることが大切である。昔から、「言葉の幸はふ國」といはれる我國の、言葉の偉力は、和歌に於て著しく榮えて來た。その妙味によつて來るところを靜かに味ははせなければならぬ。
- (3) 第四時に於ては、今までの、讀本に載せられた和歌を回顧する。どんな和歌が、どんな順序に載せられて來たか。時代と作者はどうであつたか。それによつて國民文學としての和歌の、どんなものであるかを理解させる。そのためにはこれまでの教材を一通りプリントすることが大切であらう。

三 参考

賀茂眞淵

有名な國學者で、元祿十年遠江國敷地郡伊場村に生まれた。享保十一年京都に出て荷田春滿の弟子となり、後江戸に出て田安家に仕へ、多くの弟子を集めて國學を教へた。明和六年七十三歳で歿した。

本居宣長

享保十五年伊勢國松阪に生まれた。少時より學問を好み、二十三歳の時京都に出て醫術を學び、二十八歳の時松阪に歸つて開業したが暇さへあれば讀書をつゞけ、三十二歳の時眞淵に會つて教を受けた。三十五歳の時から六十九歳まで三十五年かゝつて有名な古事記傳を大成し、享保六年七十二歳で亡くなつた。明治三十八年從三位を贈られ、山室山神社に祀られた。

小澤蘆庵

徳川時代の有名な歌人で、尾張國に生まれた。性質が非常に嚴格で、劍道にも通じ、多くの著書がある。享和元年七十九歳で亡くなつた。

香川景樹

明和五年因幡に生まれた。有名な歌人で、三歳の時字を讀み、畫を書き、七歳の時歌を詠み、十三歳で百人一首の評釋を書いた。寛政八年陸奥介となり、天保十四年七十六歳で亡くなつた。

加納諸平

遠江の人、醫師で國學者である。嘉永六年五十二歳で亡くなつた。

井手曙覽

第二十七 山ざくら花

橋曙覽とも言ひ、文化九年越前國に生まれた。歌人であり、愛國の士であり、自分の周圍にある人事風物何でも自由に歌の題とした。明治元年五十七歳で亡くなった。

大隈言道

福岡縣の人、歌人で、野村望東の師である。

野村望東

文化三年福岡に生まれ、女流歌人として名高い。又勤王家として多くの勤王志士のためにつくした。慶應三年六十二歳で亡くなり、明治二十五年正五位を贈られた。

太田垣蓮月

寛政三年三本木に生まれた。女流歌人で、尼となり蓮月といつた。多藝な人で、各種の藝能に秀でた。明治八年八十歳で亡くなった。

高崎正風

天保七年鹿兒島に生まれ、明治四十五年二月二十八日東京に歿した。享年七十七、少壯にして學を好み、早く八田知紀に就て歌道を學んだが、幕末多事の際には藩命を帯びて國事に奔走し、明治九年御歌掛を、十九年御歌掛長を命ぜられ、二十年男爵を授けられた。

尋常科用

讀本指導と朗讀法

卷十二

昭和十四年五月十六日印刷  
昭和十四年五月一日發行

【定價壹圓五拾錢】

東京朗讀研究会

代表者

著作者 藤野重次郎

發行者 河出孝雄  
東京市日本橋區通三丁目一番地

印刷所 福神製本印刷所  
東京市京橋區區廳西二丁目七番地

發行所 東京・日本橋・通三丁目  
成美堂

振替東京一七一九番  
電話日本橋一七四八番  
二七七七番



392  
485



